番外編とかその他

シロクロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
番外編とかその他

【Ｎコード】
Ｎ３４１０Ｗ

【作者名】
シロクロ

【あらすじ】
他の完結小説の番外編などリクエストされたものをまとめてここにいれていきます。

会長様はちび（前書き）

これはあいらぶまみぃの弘美に関する後日談です。

会長様はちび

「会長様ー、サボんないで下さいよー」
「うっさいわねぇ。会長様は自分の仕事は終わってるからいいのよ」
「自分のだけとか、私に４人分働けと！？」
「働け下僕」
「もー。フォローする方いないんですから、冗談に聞こえないんですけど」
「は？　冗談に聞こえたんなら耳鼻科行けば？」
「……」

私より一つ年上で背が低いくせに態度は１００倍くらいデカイ彼女は、白鷺弘美。学園長の孫娘で、他の学校でいう生徒会立ち位置の淑女会の会長になったところだ。
今までは3人の先輩方がおられたけど、今日から2人っきりだからちょっと元気がなく、不機嫌２００％だ。

「寂しいなら、小枝子様あたり呼んだらどうです？　小枝子様なら喜んで来てくれますよ」
「はぁ？　馬鹿言わないで。目の上のたんこぶがなくなって清々してるんだから」

どの口がそんなことを。目の上とか。小枝子様が会長だった時から一番態度が大きかったのに。
小枝子様というのは前の会長で、弘美さんを溺愛していた。綺麗な方で入学式の時の挨拶の凛とした立ち姿には見惚れたものだ。
淑女会というのはこの学園では憧れの対象で、初めてこの部屋に入る時は天にも登る気持ちだった。

ドアを開けた瞬間、弘美様にその幻想は砕かれたけど。

私はため息をつきつつ仕事をしながら、ひそかに回想をした。

○

4月。

私は希望と夢で胸を膨らませる可憐な女子学生だった。姉と同じ制服を着られることにはしゃいでいた。高等部の寮に引っ越している途中、浮かれた私は段ボールを抱えたまま階段で足を滑らせた。

「と、大丈夫か？」

通りがかったショートカットの方が背中を支えて、荷物にも片手を沿えてくれて事なきを得た。

危なかった。一瞬であがった心拍数に汗が出る。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして。一年だろ？　荷物自分で運んで偉いな。手伝うよ」

振り向くとにかっと小気味よい笑顔でそう言うと、私から荷物をとった。

「あ…」
「部屋どこ？」
業者が荷物を運ぶ中、私は目立っていたのだろう。そう言って彼女は私を手伝うことになった。
「終わったー」
「ありがとうございました。すみません。あ、お茶どうぞ」
「ありがと。ところで君、部活に入る予定ある？」
新手の部活の勧誘だろうか。私は中学では誘われるまま剣道部とバレー部と文芸部を兼部していただけあって、特にこだわりはない。続けてもいいし、さらに兼ねてもいい。
「いえ、特には。勧誘なら、オッケーですよ」
だから何も聞かずに頷いた。どんな部活かは知らないが、私は不得意なことは特になく器用貧乏と言われる程度にはオールマイティだ。彼女とならすごしやすそうだしいいかと気軽にオッケーした。
「え、まだ何も言ってないけど…ほんとにいいの？」
「はい。あなたとなら楽しそうですから」
「そうか…ありがとな。俺は滝口皐月。君は？」
「私は鮎川美幸です。よろしくお願いします。ところで、何の部活ですか？」
「んー…入学してからのお楽しみで」
皐月様とは連絡先を交換して別れた。
そして三日後、入学式で皐月様を見かけまさか…と思っていたら

本当に淑女会だった。
選ばれた人物のはずなのに何故私が。というか会長さんが初めて見る人で誰？　弘美様は一年ぶりに見るけどやっぱり可愛らしい人だなー。あれが噂の紗里奈様かとか色々考えながら入学式が終わり、午後に来たメールに従い淑女会室に向かった。

こ、ここにあのお姉様方が…。

生唾を飲み込み、ドアを開けた。

「は、はじめまして！　鮎川美幸です！」
「あんたは今日から私の下僕よ」
「…は、い？」
「ほら、早く靴を舐めなさい」

机に座って足を組んでる弘美様が、私に向かって足を振った。

現状が飲み込めない。ど、どういうこと？

「弘美さん、下僕は言いすぎですよ」

隣を見ると美しく微笑む小枝子お姉様が……お助け！

「美幸さんはペットにしましょう」
「あたし、首輪持ってるよ！」

さらに横からは紗里奈様が…。目眩がした。

「おいおい。美幸が気絶しそうになってるだろ。可愛い新入生をあんまイジメんなよ」

「さ、皐月様…」

そうだ。皐月様がいた。目が合うと、皐月様はにっこり笑った。

「下僕とか冗談だから、気にすんなよ。な？」

「そうそ、冗談冗談。美幸ちゃん可愛いなー。食べちゃいたい」

「ま、パシリにはするけどね」

「これからよろしくお願いしますね、美幸さん」

「…心臓に悪いです」

約2名意地が悪そうな顔をしていたけど、小枝子お姉様が優しい笑顔をしたことで何とか落ち着いた。

○

こうして淑女会への憧れは撃破された。一緒にやっていく上ではその方がよかったのだと今は思うけど。

このあと小枝子様が実は結構抜けていて天然系だとわかったりして、お姉様幻想も消えた。今ではあの頃のお姉様呼びは黒歴史だ。

こうして思い出すと、やはりかなりのインパクトがある。猫被りのギャップとか酷かった。特にこのちび、もとい会長様。二重人格レベル。

私ももう人のこと言えないけど。いやだって淑女会のイメージっ

てあるし。皐月様でさえ、一人称を私にしたりしてるし。

さて、これで一段落だ。あー、目が痛い。お茶でも……しまった。皐月様も小枝子様もいないから誰も用意してない。

「弘美様、お茶飲みます？」
「オレンジ」
「きれてます」
「買ってきて」
「お断りします」
「……」
「お茶いれますね」

冷やしておいた番茶をグラスに注ぎ、会長席に置く。会長席は実は今日まで殆ど使われなかった。小枝子様がみんなと一緒がいいと言ったからだ。だけど弘美様はいきなり会長席。おかげで私は広いテーブルを独り占めだ。ちょっと寂しい。

「いらない。なにこのクソサブい時に氷なんかいれてんのよ馬鹿」
「お茶は冷え冷えが一番美味しいんです。アイスを温めて食べないのと同じです」
「全然違う。とにかく私は今すぐオレンジジュースが飲みたいの買ってこい」
「嫌です。暇そうにぼけっとしてるんだから自分で行って下さい」

春になって一年生が入るまでならパシリをしてもいいけれど、ここでやってしまうと皐月様のようにずっと使われそうだから拒否する。

「そういえば、次の新人はどういう基準で選ぶんですか？」

淑女会には何らかの基準を満たした人だけが入れると噂され、地位に関係ないとされている。それはある意味事実だけど、選び方はテキトーだ。学年主席の人を選んだり、単に知り合いをいれたりと、淑女会の人間に権利が一任されている。

でもさすがに皐月様のように、その日最初に挨拶以外の言葉を交わした新入生、というようにして選んだのは今までに例がないらしいけど。聞いた時はちょっと凹んだ。

いや感謝はしてますけどね。去年も全く退屈しなかったし、何だかんだで皆さんのこと好きだし。

「んー…あんたが好きに選んでいいわよ」

「え？　マジすか？」

「私が抜けた後に業務が滞らないよう、優秀なやつ選びなさい。2人までね」

「お、おお…」

あれだけ暴言を吐かれていたので、たまに私嫌われてるんだろうかとさえ思っていただけに、まさか人事権を与えてもらえるとは。実はちゃんと評価されていたのか。感激。

「選ぶの失敗しても自己責任だから」

「…はい」

そういう意図か。確かに、もし仕事できない人なら、来年困るのは私だ。皐月様がテキトーに選べたのは一重に弘美様が優秀だからだ。面倒なことは押し付けてくるけど、ガチで優秀だ。

うーん。なら無難に成績のいい人にしようかな。

悩んでいるとトントン、とノックされた。

「入るぞー」

顔をあげ、返事をする前に声がしてドアが開いた。

「や、3日ぶり」

「お邪魔します」

やってきたのは皐月様と小枝子様だった。まあ返事の前にドアを開けるのは皐月様しかいないのだけど。

「おお、お二方ですか。いらっしゃいませ。ささ、どうぞどうぞ」

「おう。弘美、差し入れ」

「あ…ありがと。飲みたかったの」

皐月様が弘美様にオレンジジュースのペットボトルを渡すと、弘美様は嬉しそうににっこり笑った。

……あれ？

「弘美様、急に態度変わってません？」

いつもなら、気がきくわね、くらいの上から目線がデフォルトなのに。

「皐月様はもう淑女会員じゃないから、私が先輩として偉そうにする理由もないじゃない。年齢的には私が後輩だし」

「嘘だ！　弘美様は理由なくても態度がデカイはずです！」

「……あんたが私をどう見てるかよくわかったわ」

しまった。本音が。罠かっ！

「弘美さん弘美さん、頭を撫でてもいいですか？」

あ、小枝子様がここぞとばかりに目をきらきらさせだした。そんなに撫でたいのか。確かに今のデレ弘美様は可愛かったけど。年上に見えない。

「は？　嫌よ」

「…優しくない。もう会長じゃないんだから優しくして下さいよ」

「いや、優しくする理由じゃないし。単に、普通に普段通りの関係にするってだけだし」

なるほど、つまり弘美様は皐月様を顎で使っていたけどそれは淑女会順列仕様で、プライベートの付き合いでは仲良しだったのか。

……いや、仕事関係なくみんなで遊んだ時いつも通りだった。デレ弘美様とか初めて見た。？

「弘美は二人っきりの時は結構素直だよなー。照れ屋だから普段はつっけんどんだけど」

「何ですかそのステレオツンデレは」

完全に皐月様用のデレじゃないですか。え…そういうこと？　あれ、でも皐月様は付き合ってる人いるし……。

「弘美は小枝子のことも好きだから、二人の時に頼んでみたら？」

「！　わかりました」

「絶対あんたとは二人きりにならないから」

「な、何でですか！？」

「私を着せ替え人形にしようとしたから許さない」

「あ、あれは……ただ弘美さんに似合うと思って…別に着せ替え人形のつもりは……」
「あと私を溺愛してるとこがキモい」

溺愛されてる自覚あったんですか。いいように会長を小間使いのように扱いながらキモいと切って捨てるなんて、弘美様って本当に容赦ないなぁ。
まあ確かに、小枝子様の溺愛っぷりは小さな子供向けで気にいってなさげなのは気づいていたけど。

「弘美は相変わらず元気だなぁ。どうだ？　仕事は進んでるか？　どれ、見てやろう」

親戚のおじさんのような口調で皐月様が笑いながら弘美様から書類を受け取る。

「別に皐月様に見てもらわなくても大丈夫だけど」
「見るだけだ」
「ほんとにね」
「うん、うん……さて、遊ぼうか」

ぺらぺらと書類を見た皐月様は、書類をばさっと机に置いて満面の笑みでそう言った。おい。

「あんた何しに来たのよ」
「弘美と美幸に会いにきた」
「手伝いに来たとかでは…」
「もちろんそれもありますよ。美幸さん、何かあるなら手伝いますから、遠慮なく言って下さいね」
「小枝子様…」

さすが淑女会の良心。よし、優しくて有能そうな子を勧誘しよう。
「んじゃあんたら二人で仕事したら？　私と皐月様はトランプでもしてるから」
「会長様横暴過ぎる！」
「帰らないだけマシでしょ」

本当にギリギリになったらきっと弘美様もやってくれるんだろうけど、できる限りギリギリまで押し付けようとしてくる。私を育てるためと言われたけど信用できない。

「私にもデレて下さい。いえ、むしろ常にデレて下さい」
「はぁ？　頭割って犬と脳みそ取り替えた方がいいんじゃない？」
「…さすがに酷いだろ。弘美、口悪いぞ」
「……悪かったわよ」

今までなら確実にあんたに言われたくないと言っていたはずだ。事実、皐月様から口の悪さが移ったって紗里奈様も言ってたし。なのに素直に謝った…一応私に向けて。

「弘美様…皐月様に何か弱みでも握られてるんですか？」
「ぶっ殺すわよ」

真面目に心配したのにキレられた。

「誰に優しくしようと私の勝手でしょ」
「皐月様にだけ顕著すぎます」
「さっきからうるさいわねぇ。婚約者に優しくして問題あるわけ？」
「……は？」

何だって？

○

会長様はちび（後書き）

タイトルには特に意味はありません。数話で終わる予定です。

会長様はちび2

婚約者？　こん…こん、ダメだ。『婚約者』以外に字が思い付かない。

「ああ、そういえばそんなこともありましたねぇ」
「え…ごっこ遊びか何かですか？」
「一応事実よ」

のんびりした小枝子様の言葉に尋ねると弘美様がつまらなさそうに付け加えた。
いや、え？　女同士だし……いや、同性愛を否定するつもりはないよ？　私には関係ないし好きにすればいい。でも皐月様恋人いたじゃん。それに日本じゃ同性結婚認められてないし。どゆこと？

私が困惑してると皐月様が首を傾げた。

「あれ、言ってなかったっけ？」
「聞いてません」
「実はかくかくしかじかなんだ」
「殴りますよ」
「……美幸は相変わらず、ツッコミが厳しいな」

そんなつまらない古臭いギャグでノリツッコミして欲しいとか調子にのらないで下さい。じゃなくて！　真面目に説明して下さい！
睨むと皐月様は肩を竦めた。欧米か！

「弘美、パス」
「小枝子様、トス」

「レシーブ！」
「いいから説明して下さい」
「あんたには関係ないでしょ」
「え、ここまできて隠すんですか？」
「ぶっちゃけ説明めんどい」
「小枝子様」

当事者二人が面倒そうにジュースとお茶飲んでて期待できなさそうだったので、良心に頼ることにした。

「では説明しましょう」

困った時の小枝子様は癖になりそうなくらい頼りになるから困る。

小枝子様の話はあんまり端的じゃないけど話し方が上手いから長く聞いてる気にならない。おかげで無駄に長い物語を最後まで聞いてしまった。紗里奈様なら要点だけ言ってくれるのに、何でいないかな。

「とりあえずまとめると、皐月様は色々あって男の戸籍があってお見合いから守るために偽装婚約してるんですね」
「はい」

３行で済むことを１００倍で言ってくれたおかげで１５分もかかったが、理解はできた。
ちらと二人を見ると小枝子様の説明と同時に始まったしりとりが佳境に入っていたー

「る……ルール！」

「ルーブル」
「る…るる、る…瑠璃色」
「…瑠璃は出たけど、まあセーフでいいわ。リール」
「…る、るる…！　ルミノール！」
「ルノワール」
「……」

もういいかな。それにしても相変わらず弘美様はしりとり強いな。

「しりとりやめて下さい」
「る責めすんなよ」
「一文字責めはしりとりの基本でしょ」
「話を聞いてください！」
「あ、ああ。終わった？」
「終わりました」

しかしこの二人、確かに仲はいい。今までは弘美様が上から目線だったからそこまで見えなかったけど、よく話してる。

「婚約なー、あの時は色々あったなぁ」
「そうね」
「弘美のお母さんは結構美人だった」
「まあ……血は繋がってるし」

皐月様の言葉に弘美様は妙に嫌そうな顔をした。……お見合いを無理矢理させられる間柄らしいし、仲が悪いのだろうか。

「てか、弘美が言うような悪い人には見えないんだよな」
「本当にあんたはすぐ騙されるわね。ただ外面がいいだけよ」
「んー、でも今もちょいちょい連絡来るし……あ」

「は？　え？　なに？　初耳だけど？」
「いや、あー……なんていうか、今のはなしで」
「ああ　？　言えよ」
「……黙ってるよう言われてたんだけど」

弘美様に凄まれて皐月様は言いづらそうにしながらも話した。皐月様によると、月一くらいで弘美様と仲良くしてるのか、今後も頼むみたいな内容の電話がくるらしい。かなり弘美様の様子を気にしてるらしい。

「…そんなの、あんたと私を別れさせたくないだけよ」
「んー、つか…お前の悪口からうける印象とどうも違うんだよな。母親の話嫌うから今まで言わなかったけどさ、一回くらいちゃんと話した方がいいぞ」
「余計なお世話よ」
「…まぁ、強制はしないけどさ」

何だか、意外だ。皐月様はもっとプライベートもぐいぐい突っ込んでくるタイプだと勝手に思っていた。皆さん仲がいいし、余計にそうかもだけど。
だから弘美様を助けはしても家庭の事情自体には食いつかないのは、意外な印象だ。皐月様も気をつかうんだ。

「ちなみに彼女さんはそのこと知ってるんですか？」
「ん？　婚約のことなら知ってるぞ」
「何も言われないんですか？」
「ないって。弘美と七海も仲いいしな」
「へぇ」

それにしても、婚約者と恋人が別人でみんな仲がいいとか、それ

だけ聞くと凄い関係だなぁ。

結構親しく付き合ってきたつもりでも、意外と知らないことばかりなんだなぁと思った、そんな日だった。

○

衝撃の婚約発覚から、二ヶ月ほどたった。昨日は卒業式だった。

一年未満の付き合いだけど、不覚にもうるっときてしまった。密度の濃い一年だった。

「いざ卒業となると、あんま感慨ないなぁ」

だと言うのに、一日たった今日は皐月様もみんなケロッとしてる。私の涙を返せ。何で当たり前みたいにいるんですか。いや、別にすぐいなくなって欲しいわけじゃないけど。

「さっきまで泣いてたくせによく言うわ」

「うーん…それは雰囲気で。よく考えたら、別にそう悲しいことでもないよな。進学も決まってるし」

「…ふーん、私と別れるのに平気なんだ」

「え？　拗ねんなよ。会いたくなったら会いに行くからさ。あ、美幸もな」

「ついでみたいに言われても……。まあ、たまには会えたら嬉しいですけど」
「美幸ちゃんは可愛いなー。ツンデレだね。付き合おうか」
「慎んでお断りいたします」

紗里奈様はちょいちょい告白してくるのがうざいのはいつものことだとして、弘美様はマジツンデレ。

「てか弘美様と一緒にしないでください」
「おい。あんたは本当に一年のくせに生意気よね」
「それはほら、敬愛する弘美様を見習ったまでです」
「……」
「弘美さん、言われちゃいましたね」
「…ちょっと、今のつまり私のことを生意気と思ってるってことよね」
「あ…すみません。口が滑りました」
「本音ですか。小枝子様マジ腹黒」
「ちょ、ちょっと美幸さん。もう…美幸さんの世代が心配です」
「どういう意味ですか」

習慣でツッコミはいれたけど、確かに自分が会長になった姿は想像つかない。というか中学でもあんまり偉そうにしなかったし、弘美様の立場になって果たして偉そうに振る舞えるだろうか。

「……ちょっと小枝子様、土下座してください」
「何でですか！？　え！？　そんなにですか！？」
「いえ、ただちょっと偉そうにする練習です。小枝子様なら怒らないと思ったので」
「……信頼されてると喜ぶべきなんでしょうか。それとも舐められてると怒るべきですか？」

「てか何で偉そうにする練習なんだよ？」
「だって私が会長になったら、弘美様みたいに偉そうにしなきゃいけないじゃないですか」
「おい。あんたそれマジで言ってる？」
「マジですが？」
「…おい、弘美。お前どういう教育したんだよ。馬鹿な子になってるじゃん」

皐月様がこそこそしながら弘美様に耳打ちすれけど、聞こえてますから。誰が馬鹿ですか。

「私のせいにしないでよ。ちょっと美幸、会長だからって偉そうにする必要ないわよ」
「そうなんですか？」
「逆に聞くけど小枝子様のどこが偉そうに見えたわけ？」
「え？　小枝子様が会長の時から弘美様が陰の会長だったんじゃないんですか？」
「うわ、否定できねぇ」
「否定しなさいよ馬鹿」
「だっていつも偉そうだったじゃん」
「単に私が偉いからそう振る舞ってただけよ」
「あー、はいはい。よしよし」
「…舐めてんの？」
「撫でてんの」

皐月様に頭を撫でられた弘美様は唇を尖らしてるけど満更でもないらしい。実に子供っぽくてよろしい。
それにしても、会長として威厳を保つため淑女会内では偉そうにしなければならないと思っていたけどどうも違うらしい。

「美幸ちゃんは馬鹿可愛いねぇ」
「まさか褒めてるつもりですか？」
「うん」
「皮肉のつもりだったのに……紗里奈様だけは今だに性格が掴めません」

というか、紗里奈様の真意が読めたためしがないんだよね。いつも笑ってるし。いい人ではあるけど胡散臭いなぁ。

「ま、美幸ちゃんは美幸ちゃんで何とかなるでしょ。あたしらには関係ないし、ガンバレ」
「紗里奈さん…いくらなんでも無責任ですよ」
「あっれー？　なら小枝子は美幸がなんかしたら責任とるの？」
「……とりませんけど」
「あの、というか『なんか』ってなんですか。私そんなに信用ないんですか」
「美幸は真面目だなぁ。ただの冗談だから気にすんなって。まあ人数が少ないのは心配だけどな。二人いれたら半分新人だし、教育と同時進行しなきゃだし、美幸は真面目だけど弘美ほどできないし」
「……」

皐月様に言われたくない。言われたくないけど、弘美様より仕事できないのは事実だ。ていうか弘美様といい、紗里奈様といいやる気ない人に限ってハイスペックすぎなのよ！　小枝子様も割とできる人だし。私は凡人なだけです。

ぶるぶる。

文句の一つくらい言ってやろうかと口を開いた瞬間、携帯電話のバイブ音が響いた。弘美様の携帯電話が机に出しっぱなしだったせ

いでやたら音がしたらしい。

「ん、はい、もしもし」

誰だろう。

「ああ、え？　何で？　……は？　嫌よ。何で、え……はい、わかりました」

嫌そうに眉をひそめた弘美様ははっとしたように、表情を固めた。人形みたいな無表情になった弘美様なんて初めて見た。誰？　何があったの？

「弘美様？」

「何かあったんですか？」

「……皐月様、一緒に…来てくれる？」

私と小枝子様の呼びかけをスルーして、弘美様は皐月様を不安そうに見つめた。皐月様は真顔になって弘美様の頭を撫でた。

「当たり前だろ。どこにでも行ってやるよ」

「……ありがとう」

「馬鹿、当たり前のことで礼を言うやつがいるか。ほら、何処行くんだ？」

手を離してから弘美様の手を握って、皐月様は立ち上がった。

「…学園長室」

「お、そういや学園長にまだ挨拶してなかったな。ちょうどいい。行こうか」

「…うん」

大人しく、中身まで小さな女の子みたいな弘美様なんて初めてで、何も言えずに二人を見送った。

「…何があったんですか？」

一人平然としてる紗里奈様に尋ねると肩をすくめられた。

「さあ？　知らね」

「知らねって…心配じゃないんですか？」

「心配か心配じゃないかなら、心配じゃない」

「何でですかっ？」

紗里奈様が何かしたわけじゃないのはわかっているけど、どうしても責めるような口調になってしまう。へらへらした人だけど、肝心な時には頼りになる優しい人だと思っていたのに。

「心配しなくても大丈夫だよ。皐月と出て行ったんだから」

「…は？　皐月様がなんなんですか？」

「うーん…なんつーか、皐月ってめちゃくちゃだけど、なんだかんだで何とかなるんだよね」

「はあ？」

何だそのアバウトな信頼は。人格的にはともかく、皐月様に何ができると言うんだ。あんな青い顔の弘美様は初めて見たし、一人の力で何とかなるものなのか。そもそも何が起こってるのかわからないというのに。

「…まあ、そうですね」

「え、ちょっと小枝子様、納得するんですか？　心配しないんですか？」
「心配ですよ。でも結局皐月様が報告なりしてくれないと事態もわかりませんから、むやみにうろたえても仕方ありません」
いや、そ、それはそうだけど。……やっぱり心配だ。
「私、やっぱり様子を見に行ってきます」
「やめた方が…」
止められたけど、居ても立ってもいられなくて私は部屋を飛び出した。

○

会長様はちび2（後書き）

次話は書き方でちょっと悩んでるので更新は未定です。

会長様はちび3

必死な形相に、弘美の言うように戻った方がいいのかも知れないと思った。たとえどんな理由で母親が冷たいとしてもきっと弘美は傷つく。

だけどこのままじゃ弘美はこれからも母親と会う度にあんな顔をする。卒業したから、その時に必ず一緒にいてあげられる保証がない。

せめて少しでも改善すればいい。もし無理で、本当に酷い人なら弘美と二度と会わせたくないし、確かめたい。こんな機会はもうないかも知れない。

だから俺は弘美の手を振り払った。

「ごめん、嘘ついた」

「っ、死ねっ！！」

絶望したように涙目になった弘美は、俺に思いっきり平手打ちをして出て行った。バタンと大きく学園長室のドアが閉まる音がした。

真正面だから避けれたけど、あえて受けた。はっきり言ってかなり痛かったけど、弘美の方が痛いんだと思うと胸の方が痛かった。

「すみません、勝手に決めて。今いいですか？」

「…構わないわ。痛かったでしょう？　ごめんなさいね。あんな気性の激しい子ではないのだけど…」

いや、気性は元々激しいですとは言えなかった。というか、やはりというか、とても普通だ。とても酷い人には見えない。

「皐月さん、これで冷やしてください」

学園長がハンカチを濡らして俺に渡した。冷たくて気持ちいい。

「すみません」

「いえ。話があるなら私は席を外しますが？」

「あ、いえ……学園長にもお尋ねしたいことはありますから、いいですか？」

「はい」

「それで皐月さん、話というのは何かしら？」

二人に見つめられ、どう言おうかと思案する。具体的にプランがあったわけではなく、完全に勢いだ。

「あの…お母様は、弘美のこと好きですか？」

思い切って、直球で聞いてみた。弘美は『あの人はヒロのこと嫌い』と言っていたから、これが否定されたら弘美が大きく勘違いしてる可能性がある。

「……自分の子供を嫌いになる人がいないとはいわないけど、その人はもう親とは言えないわ。そう思わない？」

「じゃあ…」

じっと期待をこめて見つめると、お母様はため息をついて足を組んだ。

「ふう…わかったわよ。電話に付き合ってもらっていたし、とことん付き合うわよ。あ、弘美の婚約者が嘘なんだから、もうお母様はやめて。おばさんでいいわ」

「え…でも、おばさんというには美人ですし…」

「ありがと。でも友達の母親なんておばさんで十分よ。弘美のことはもちろん好きよ。可愛い子供だもの。当然でしょう？」

にこっと微笑んで言われた。その笑顔は機嫌のいい弘美に似ていて、ああ、やっぱり親子なんだなぁって今更思った。

「でも、弘美には言っちゃダメよ。私のことは嫌な女と思わせておいて」

「え？　な、なんで、ですか？」

「……あなたは卒業するし、付き合うって言ったからもう話すけど、絶対に弘美には言っちゃダメよ？　もし言ったらあなたの口を縫うから」

真顔で睨まれながら言われてビビりつつ頷く。

「わかりました」

後でそれとなく弘美に伝えることを心に誓いながら、必死で視線を合わせる。嘘だとばれたら話してくれないだろう。

しばらく見つめあってから、俺の気迫を感じたのかおばさんはため息をまたついた。

「あの子の父親が死んでるのは知ってるわよね？」

「はい」

「その原因、私ということになってるから。だから私は財産目当てで結婚したあげく殺した最悪な女って思われてないと困るわ」

「……ん？　……んー…すみません、よくわからないんですけど」

勘違いをさせてる？　悪く思われなきゃ困る？　どういう状況だ？

「つまり……どう言えば最も効率よく説明できるかしら。お義母様に話した以来だから、どう説明すべきか…」
「あの、効率とか良いので、話せるだけ話してくれませんか？」
「……そうね、そうするわ」

○

早くここから離れたかった。あの女と話なんかしたくないし、皐月様にもして欲しくない。
なのに皐月様は、私に先に帰れなんて言う。
「私と一緒に…、いるって、言ったじゃない」
皐月様の手を引きながら言う。返事はわかってた。皐月様は決めたらすぐに突っ走る馬鹿だから、断るってわかってた。
「ごめん、嘘ついた」
それでも断られて泣きそうだった。一緒だって言ったくせに。嘘つき。
「死ねっ！！」
泣きそうになりながら、でも涙は見られたくなくて、私は皐月様

を叩いて部屋を出た。

「っ」

開け放しの談話室を飛び出し、一直線に学園長室のドアを開けたその瞬間、何かとぶつかりかけて慌てて足をとめた。何かは慌てててのけ反ってこけた。

私はその間抜けな姿に涙を引っ込めて、ドアを閉めた。

「…なにしてんの？」

「……盗聴？」

立たせてやって小声で尋ねると美幸はいやーあははと愛想笑いをしてから、小さな声で言った。

「……」

「…すみません」

「聞こえた？」

「え、はい、耳をくっつけたら何とか」

私はすかさず反転して耳をあてた。美幸も隣で耳をあてた。なんだこいつと思ったけどバレたらめんどいから無視。

学園長室自体は実は防音ではない。何かあった時に悲鳴が通らないといけないからとか聞いた。代わりに奥の部屋が防音だけどドアが開けっ放しだから防音が機能していない。

「ーい？」

少しくぐもっているが、何とか聞こえる。しかし聞こえにくい。

ん、そうだ。

私は鍵穴に耳をあてた。

「ふう…わかったわよ。電話に付き合ってもらっていたし、とことん付き合うわよ」

よし。小さな穴だけど空間が繋がってるから、音量は小さいけどクリアに聞こえる。古い鍵穴で助かった。

「あ、弘美の婚約者が嘘なんだから、もうお母様はやめて。おばさんでいいわ」

「え…でも、おばさんというには美人ですし…」

…なに普通の世間話してんのよ。そんなことがしたかったわけ？てか、普通の人みたい…そういう会話できたんだ。

「ありがと。でも友達の母親なんておばさんで十分よ。弘美のことはもちろん好きよ。可愛い子供だもの。当然でしょう？」

……え？

突然聞こえた脈絡のない単語に、聞き間違いかと疑った。だって、文章がおかしいし、なによりあの女が、私を好きだなんて言うはずがない。

「でも、弘美には言っちゃダメよ。私のことは嫌な女と思わせておいて」

意味がわからない。皐月様が理由を尋ねる。そのスムーズな流れに、だけど嫌な予感がした。

今すぐにここを離れるべきだ。そう私の勘が言っていたけど、体は動かなかった。何か、もし何か私が勘違いをしていたというなら、

私は真実が知りたい。

「あの子の父親が死んでるのは知ってるわよね？」

「はい」

「その原因、私ということになってるから。だから私は財産目当てで結婚したあげく殺した最悪な女って思われてないと困るわ」

その言葉を聞いて絶望的な気持ちになった。思われないと困る理由はわからないが、つまりあの女は財産目当てでもパパの死因でもないということだ。

おかしい。なにがどうなっているんだ。私は確かにあの女のせいだと記憶してる。いつもパパに酷いことを言っていたから、間違いなはずがない。

「小さい時の弘美は、今よりもっと小さくて可愛かったわ。素直で、私の言うことはなんでも聞いたし、信じたわ」

呆然とするうちに、あの女が昔語りを始めた。

もういい。帰りたいと心の何処かが弱音をはいた。このままここにいたら、きっと傷つく。だけど体が動かない。

「誕生日に何が欲しいって言ったら一緒にいてほしいなんて言う子で、淋しがり屋だけど父親が忙しい時に駄々をこねたりしなくて、クッキーの一つもつくってあげたら笑顔になってくれる、本当に手がかからない、いい子だったわ」

嘘だ。嘘だ。嘘……嘘だ。だって、そんなの…そりゃ、昔のことだから懐いていたというのは不思議じゃないし、全部覚えてるとは言えないけど、あの女にクッキーをつくってもらってたなんて…。

……そういう夢、何度か見たけど、でもそれは、私の願望で…そ

んな、だって……過去の出来事を、夢に見ていた？　あの女が私を嫌ってないなんてそんな馬鹿な話……。

頭の中で信じられない気持ちと、何故か納得する気持ちが揺れ動く。だって確かに、私にはその記憶がある。夢と混同したのだと決めつけていたけれど。

だけどそうだとして、どうして私がそんな思い込みで記憶まで捩曲げて認識するんだ。

今すぐ中に入って聞きたいとも思ったけど、同時にとても恐かった。逃げ出したかった。でも、逃げたくない。

私は初めて、あの人と向き合おうと思った。それでも飛び出す勇気がない私は、ただ静かに続きを待った。

「そんなある日、あの人は出張だったわ。仕事柄出張が多かったし、一週間の出張で短かったから家を出る時にも弘美は笑顔で見送ったわ」

出張、そうだ。出張に行く日、お土産は何がいいって聞くパパに、あの人はなんでもいいけどセンスがないんだから誰かに聞くのよと言った。

昔のこと過ぎて朧げになっていた記憶が鮮明になる。早く帰ってくるというパパに、急がなくたっていいわよ、いなくたって気にならないからと言う。そんな風に言われてパパは笑っていた。どうして笑っていたんだろう。全然愛情の感じられない言葉なのに。

酷いことを言ったという怒りがわいてきたりはしなかった。ただ疑問だった。そう、パパは確かに笑ってた。パパはママを愛していた。当たり前なのに、忘れてた。

「それから5日目の夜、弘美が熱を出したの。お医者様にも見せたし、命に別状はないけど、ただ熱が酷くて弘美は寝ながら泣いてい

たわ」

え？　そんなこと、あったっけ？　……駄目だ。思い出せない。熱があったというから記憶が曖昧なのだろう。

「それで泣きながら、うなされながら、こう言うの。「パパ、パパ」ってね」

「……」

何故か泣きそうになった。体が震えてとまらない。それでも、聞きたい。何があったのかを知らなきゃいけない。それを皐月様が望んでいるし、私もそうしたい。

「だから電話をかけたわ。あの子の我が儘なんて初めてで、叶えるしかないじゃない。弘美に、パパすぐ帰ってくるからねってあやしながら、待ってたわ。だけど、帰っては来なかった」

息が、できない。

○

会長様はちび４

「だから電話をかけたわ。あの子の我が儘なんて初めてで、叶えるしかないじゃない。弘美に、パパすぐ帰ってくるからねってあやしながら、待ってたわ。だけど、帰っては来なかった」

そう言った目を伏せたおばさんは泣きそうで、少し黙った、

話が始まってから、想像がつかなかったわけじゃない。何となくわかっていた。でも、言われてしまうと、わかってても悲しくなって何を言えばいいのかわからなかった。

「……それを、隠すために嘘を？」

「最初は、隠す余裕なんてなかったわ。私も若かったから、気が動転して泣きながら、帰ってくる途中で事故に遭って死んでしまったとありのまま言ってしまったの。馬鹿だったわ。弘美はすぐにごめんなさいって、私のせいでパパが死んじゃったって、泣きだして、それでようやく、私は言ってはいけないことを言ったと気づいたの」

それは…仕方ないと思う。その時はおばさんも若いし、何より大切な人が死んで動揺しない訳がない。混乱して何も考えずに言ってしまったんだろうと思う。

「慌ててそれは違うと宥めたけど、弘美は熱にうなされたままごめんなさいと呟きつづけて、泣き疲れて眠ってしまったわ。次の日、弘美は少し熱が高くなっていて、ご飯を食べようとはしなかったわ」

弘美がどんな気持ちだったのか、俺にはわからない。父親のことは殆ど覚えてないし、さらに熱で体調も最悪になったこともあんま

りない。ただ同情した。あんまりにも可哀相だ。

「お医者様は精神的ショックで熱があがっているのだろうと、ちゃんと栄養をとれば大丈夫と言われたわ。でも次の日も弘美はご飯を食べなくて、点滴もうって、食べなさいって言ったけど、食べなくて…」

おばさんが泣きだした。俺も何だが泣きそうだった。

思いつきの軽い気持ちで尋ねたことを少し後悔した。だけど、こんな事情があるからこそ、放置することはできない。おばさんを傷つけたことも、弘美を傷つけるだろうことも申し訳ないけど、俺は最初の意思を曲げるつもりはない。

「……」

今度は促さずに、ただおばさんを見つめて続きを待った。

「っ…ごめんなさい。少し、思いだして。はぁ…弘美が苦しんでいるのを見て、私は……弘美の耳元でこう言ったの。『パパが死んだのはママのせい。ママは財産目当ての嫌な女で、パパを無理矢理働かせて、出張に行かせて、事故に遭わせた。全部全部ママのせい。弘美は何も悪くない』って。熱でもうろうとした意識ならごまかせるかと思ったのよ。まだ小さかったから」

「それで、ああなったんですか…」

「すぐには無理だったわ。でも一晩中囁いたらいい加減効いたみたいで、目が覚めた弘美はご飯を食べたけど、以前とは違うよそよそしい態度になったわ」

「……正直、おばさんの前ではまだいい子ぶってます。効き過ぎです」

「お義母様から聞いてるわ。暗示が効いてるならいいのよ。私が我

慢すればいいだけだし。でも、どうしてか私の前では従順なのよね」

無意識に覚えているのかも知れない。いくら小さい時でも弘美は頭がいいし、簡単に暗示にかかるとも思えない。

完全に推測だけど、弘美自身が楽になろうとしてそれを受け入れて、自分自身に暗示をかけたんじゃないだろうか。だから無意識に母親に八つ当たりなのはわかってるから、従うんじゃないだろうか。都合のいい妄想だけど、そんな気がした。

「…話してくれてありがとうございました」

「いえ…いいのよ。疑問に思うのも当然だわ。私が弘美につれなくすればよかったんでしょうけど、どうしても出来ないから距離を置いたのだけど……気になってあなたには頻繁に聞いていたから、それは気づくわよね」

「すみません」

「謝らなくてもいいのよ」

「いえ、謝らなければなりません。だって、弘美に言うつもりですから」

「え…？」

「失礼します」

「ちょっ、ちょっと待ちなさい！」

立ち上がると慌てたおばさんが俺の手を掴もうとしてくるから手をひき、すっと半回転しておばさんを避けながらドアに向かってもうダッシュ。

「待ちなさい！！」

「ほんとすみません！」

ドアを開けた。

○

「だって、弘美に言うつもりですから」
「え…？」

名前を出されてようやく我に返った。だけど以前として頭の中はぐちゃぐちゃで、泣きそうだった。
逃げなければ、とどこか本能が叫び私は走り出した。

「？　弘美様？」

美幸は無視した。早く、早く！

数歩進んで転んだ。足ががくがく震えていることに気づいた。

「ごふぅっ！」
「あ、ごめっ、美幸！？　なんでここ、いやどうでもいい！」

音がして皐月様が出てきたのを察して私は慌てて立ち上がってまた走り出す。

「！！　弘美！　待て！」

呼ばれて、立ち止まりたくなるのを堪えた。嫌だ。皐月様がいたらおかしくなる。今の私を見てほしくない。何を言うつもりかわからないけど、何も言われたくなかった。何をするか自分でもわからない。

逃げなくちゃ、と訳もわからぬまま焦燥に狩られて私は足を動かす。

「弘美！」

後ろから抱きしめられた。当たり前だ。皐月様が本気なら、こんなふらふらの私を捕まえるなんてわけない。

抱きしめられた瞬間、体の震えがとまった。ほうと息が口から漏れて、同時に体が熱くなる。

ぐるぐると思考はループして頭は沸騰し、怒りがお腹の底から沸いていていらいらして叫びだしたいくらいだ。

「は、離して！！」

それでも馬鹿みたいに吠えずに意味のある言葉だっただけまだ私は冷静なはずだ。

「離さない！　絶対離さない！！」

「っ……」

あらゆる罵声が頭を過ぎる。どういえば離すのか、一瞬考えた。すぐに結論は出た。

「さー」

「喋ると舌噛むぞ！」

「つ！？」

だけどそれを言う前に、皐月様は私を抱えて走り出した。

「皐月さん！？」

「ホントにすみませんー！」

皐月様は階段を飛ぶように駆け降りて一階の空き部屋に飛び込んだ。呆気にとられてるうちに狭い教室の机の隅に押し込まれた。ここなら入口からぱっと見えない。

ふぅと息をついた皐月様にはっと我を取り戻し、私は言おうとしていた言葉の続きを口にした。

「…逃げないから、離して。苦しい」

「お、おお、すまん」

力が弱まったので逃げる。

「おい！」

皐月様を乗り越えようとしたところですぐに捕まってしまった。皐月様の膝の間にはまってより強く抱きしめられてしまった。

「お前、冷静すぎるぞ」

当たり前だ。私は冷静だ。混乱して暴れたい衝動すらあるけど、それを自覚して我慢する程度には冷静だ。

「……離してよ。一人になりたいの」

「嫌だ。どこまで聞いてた？」

「全部聞いてたわよ。私のことは放っておいて」
「お前のせいじゃない」
「テキトーなこと言わないで！！　……慰めはいらないわ」

私のせいじゃないだって？　馬鹿じゃないの。軽々しく、何の中身もない慰めを口にして、それで私が救われるとでも思っているのか。

パパがどうして死んだかなんて、私のせいに決まっている。他に理由があるものか。そのあげく、ママに全て押し付けて、忘れて八つ当たりをして、我が儘放題に生きて、最低だ。

私より最低な人間がいるものか。私なんて、生まれてこなければよかった。私のせいでパパも死んで、ママを苦しめた。何をしているんだ。

「それでもお前は悪くない」
「だからっ」
「お前が好きだ」
「……は？」
「めちゃくちゃ好きだ」
「……あんた何言ってんの？」
「お前のためなら何でもする」
「何がいいたいのよ」
「お前の両親も、お前がめちゃくちゃ好きだ。だから帰ってきたし、嘘をついた。それだけだ。お前が悪いんじゃない」
「そういう問題じゃないわよ！　このウルトラスーパー馬鹿！」
「うん、俺馬鹿だ。何言えばいいか全然わからん。でもお前を離したくないのはホントだから、信じてほしい。俺、お前が好きだよ」
「だ、から……もう」

意味がわからない。それが一体何になる。論点が違う。何もかも

違う。

とりあえずママには会わせる顔がないから離れられたのはいいとしよう。私だけではここまで来れなかった。皐月様の馬鹿のおかげで衝動的な気持ちや興奮は少し収まった。

だけど、皐月様とだって話したくないのは代わらない。まだまだ考えはまとまらないし、憂鬱だし自己嫌悪で泣きそうだ。背中から抱きしめられていて顔をお互いに見れないのは幸いだ。

「もし、お前が何もかも嫌で逃げるなら、俺も一緒に逃げるから、俺からは逃げるなよ。泣くぞ」

「泣けば」

「……ひでぇ」

皐月様がうっとおしい半面、馬鹿みたいな話をしていればさっきのことについて考える脳みその割合が減るから、少しだけ楽だ。それにどうせ逃げられない。だから仕方なく、嫌だけど、会話に付き合ってあげることにした。

「どっちがよ。だいたいあんたみたいな嘘つき信用できないわよ」

「あー、さっきのはたまたまだから」

「何がどうたまたまなのよ」

「今度こそ本当にお前から手を離すまで離れない。ずっと一緒にいるよ」

「……嘘つき」

「嘘じゃない。俺を信じろ」

よく、そんなことが言える。破ってすぐに同じ約束をして信じろなんて、誰が信じるんだ。

「……本当に？」
「本当だ。お前が逃げるっていうなら、地球の裏側にだって逃げてやる」

馬鹿馬鹿しい。中身のないその場しのぎでテキトーなことばかりいう、そんな皐月様の言葉を信じるなんて馬鹿だ。
そんなことわかってるのに、私は信じたいと思った。皐月様を信じたい。

「……もし、私が、逃げるって言ったら、ずっと一緒にいてくれるの？」
「もちろん」
「七海様は？」
「んー、まあ、地球のどこでも電波が届けば連絡だって毎日できるし、多分わかってくれるって」

馬鹿。自分以外の女と二人で逃げることを許す恋人がどこにいるのよ。まして私と皐月様は血が繋がってるわけでもないのに。本気で言ってるからタチが悪い。
皐月様は馬鹿で、その場その場しか見えてないし、楽観的で考えなしで嘘つきだ。
でも、言っているその時だけは誰より本気だって知ってる。調子がよくテキトーなくせに、自分の気持ちには嘘をつかない。だから信じたくなる。今この瞬間には一つも嘘がないから、信じてしまう。

「……こんな最低な私でも、好き？」
「好き。お前が最低って思ってても、俺にとっては最高だよ」
「……私が最低じゃないなら、誰が最低になるのよ」
「じゃあ最低なお前が好きだ。最低最悪でもお前が好きだ」

じゃあ、って、ふざけているのか。適当にもほどがある。そう思うのに、嬉しいと感じてしまった。
最低に最悪を重ねて、自分で嫌いなくらいに嫌なやつである私を、皐月様は好きだと言う。口先だけのくせに、保証なんてないくせに、信じてしまう。
皐月様は馬鹿だけど、私の方が馬鹿だ。それでも構わないなんて、救いようがないほど馬鹿すぎる。

「……私も、好き」
「うん、知ってる」
「…馬鹿」

あまりにも簡単に、単純に、私の中で渦巻いていた恐怖や自己嫌悪は穏やかに凪いだ。自分を責める気持ちがなくなったわけじゃない。だけど皐月様がどんな私も好きだと言うなら、私は私のまま生きていける。

自信過剰で傲慢で、こんなにいい加減な人が他にいるのかってくらいテキトーな癖に、私はこの人が好きだ。
恋ではないだろう。今まで七海様に嫉妬したりはしていない。姉妹ごっこの家族愛なのかもわからない。ただ、皐月様が大好きだ。
本当に困った時は本気で全力疾走して私のところに来てくれる。偶然でもたまたまでも、私にとって皐月様はヒーローだ。
皐月様が単に馬鹿で、私の苦悩も罪深さもママの傷の深さもわからないだけだってわかっていても、私を許してくれて、当たり前に引っ張ってくれる皐月様は、私にとって救い主だ。

「……戻る」
「え、いいの？」
「最初からそのつもりなんでしょ？」

「そうだけど…まあいいか。善は急げだ」

よいしょと皐月様は私を抱き上げて立ち上がり、私を降ろした。そして私の左手を握った。

「行くか」

「うん。……手、離したら許さないから」

「わかってる。お前が離すまで離さないよ」

嘘つき。理由さえあれば簡単に離すくせに。本人は本気だからタチが悪い。皐月様なんて、豆腐に頭ぶつけて笑われればいいのよ。

何もかも皐月様の思い通りだ。腹がたたないわけではない。でもそれを選んだのは自分だ。皐月様が私を本気で思ってくれるなら、私も本気で皐月様に応える。

皐月様が望むならママと向き合う。それは恐いけど、一人じゃないから、きっと逃げずにできるはずだ。皐月様がいるなら例え詰られ罵られたとして、堪えられる。

○

会長様はちび４（後書き）

これはかなり悩んで書き直しては切って張ってしました。
皐月の馬鹿っぽさとか、だから弘美が救われるのが伝わればいいんですが。弘美は皐月の考えはだいたいわかります。
弘美の心境が難しかったです。

あと１話で終わりです。

会長様はちび５（前書き）

ラストです。

会長様はちび5

あ、やばい。と思った時には遅かった。

「ごふぅっ！」

「あ、ごめっ、美幸！？　なんでここ、いやどうでもいい！」

人に全力でドアをぶつけておいてどうでもいいとか！？　いや確かに私が悪いけど！

「！！　弘美！？　待て！」

皐月様は弘美様を捕まえたかと思うと、連れて逃げた。

「皐月さん！？」

「ホントにすみませんー！」

え、えええぇぇー…なんだこの状況。

「……」

とりあえず盗み聞きしてたことはバレバレだよね。ど、どうしよう。

「追いかけます！」

弘美様のお母様とか面識ないし、学園長とか恐れおおい！　ていうか今は呆然とされてるけど我に返ったら怒られる！

私は慌てて二人、というか皐月様を追った。遅れたけど、人一人

担いでる皐月様に追いつけないわけが……

「……いない」

階段を駆け降りて外を見たけど誰もいない。まさかもう向こうの校舎に！？　いや、最後まで降りてない可能性とか、その辺の茂みに行った可能性とか……やばい、あの人の脚力の場合ガチで向こうの校舎まで走ってそう。

いったいどこに行ったんだ。ていうか、探しに行って……いいのかな？　ガチで見つけたら見つけたでどうすれば……このまま淑女室に戻っても誰も気にしない気がする。

「……はぁ」

好奇心に負けて盗み聞きした罰か……。いやだって、気になったんだもん。

帰るのも……気になる。すっごく気になる。あんなふらふらの弘美様初めて見た。皐月様はいつも通りだけど。とにかく弘美様が心配だ。

適当にその辺の空き教室で時間を潰して、二人が戻ったころにまた戻って、盗み聞きを……いや、いけないことなのはわかってるけど、本当に、心配だし待ってはいられない。最悪なにも話してくれない可能性もある。

私は弘美様のことをなにも知らないことに、今更気づいてしまった。

「はあぁぁ…」

ため息が出てしまう。だって女の子だもん。……我ながらキモい。

私は二人が戻ってきたらすぐにわかるよう、階段の隣の部屋に一

「は？」

入ろうとしてふいに聞こえたのはたった一音だけど、誰かすぐにわかった。聴力には自信がある。私はすぐにしゃがんでドアの隙間に耳をあてた。

何やってるんだろうと思わなくないけど、弘美様の一大事で非常事態なんだから今回だけは神様も見逃してくれるはずだ。

「めちゃくちゃ好きだ」

……皐月様は頭おかしいのかな。前から馬鹿だと思ってたけど。とは言え出ていく訳にはいかないからじっと盗聴、もとい傍聴に徹した。

皐月様の空気読まない発言とか、私は呆れて内心少し馬鹿にした。信じろだとか、よくも少年漫画みたいな台詞を平然と口に出来るものだ。

だけど、弘美様はそう思わなかったらしい。

「……こんな最低な私でも、好き？」

こんな台詞を弘美様が、しかも皐月様に言ったなんて、自分の耳を疑った。この間まで酷い時は王女様と下僕のようだったのに。

「好き」

即答する皐月様は早過ぎて軽く聞こえる。弘美様の落ち込んだ気

持ちを想定できないかのごとく軽い。

「……私も、好き」

「うん、知ってる」

「…馬鹿」

恋人のようなやり取りなのに、皐月様は軽すぎるし、逆に弘美様は涙まじりなくらいの弱々しい声で、聞いていて悲しくなった。

今のやり取りで弘美様が気持ちを持ち直したのはわかったけど、どうして持ち直したのか全くわからない。

心揺さぶられるほど深いことは皐月様は言ってないはずだ。なのにどうして？

「わかってる。お前が離すまで離さないよ」

はっ！　しまった。ええっと、とりあえず階段の方へ。

「うわっ」

慌ててたせいで一段目で足を踏み外した。滑って転んだ。階段にはいかず体を捻って床に倒れたのは我ながらファインプレー。

「……あんた何してんの？」

さっきの可愛い声は幻聴だったのかと言いたいくらいの冷たい言葉に愛想笑いを返す。

「美幸、大丈夫か？」

皐月様が弘美様と繋いでいるのとは逆の手を差し出してきた。さ

すが皐月様。優しい！　弘美様とは大違いだ。
「ありがとうございます」
手を掴んで立ち上がる。
「美幸はドジだなぁ。気をつけろよ」
「いやぁ、えへへ」
ドジってほどじゃない！　全く。一言余計です。
「てか、あんた盗み聞きもいい加減にしなさいよ。趣味なの？」
「趣味って。そんなわけないでしょう。こんなことしたの初めてです」
「嘘つくんじゃないわよボケ。すでに二回目のくせに図々しいわね」
「今回はって意味ですー」
「まあまあ、美幸も心配してたんだろ。ていうか弘美も盗み聞きしてたじゃん」
「私は自分の話だからいいのよ」
うう。後ろめたさがないわけではないので弘美様のジト目が痛い。
「とりあえず行こうぜ。美幸も、全部聞いてたなら気になるだろ。最後まで付き合うか？」
「お願いします」
「えー、連れてく必要あんの？」
「また盗み聞きされるよりマシだろ？」
「……それもそうね」
「あの、反省してるのでそのネタは引っ張らないでくれません？」
「黙れ、盗聴野郎」

「野郎じゃないです」
「黙れ、盗聴女郎」
「め、めろう…？」

よくわからないけど酷いこと言われてる気がする。いつもだけど弘美様刺々しすぎる。皐月様にはデレ弘美だったくせに。私にもデレろ！

弘美様に邪険にされつつもついて行く。

「ただいま戻りましたー」

家に帰るくらいの気軽さで片手をあげて挨拶する皐月様の図太さに脱帽。

学園長にこの態度ってのもあるけど、あの後でよく平然としてられるなぁ。普段から度胸あるとは思ってたけど素直に尊敬する。

「はい、お帰りなさい。今お茶をいれますね」
「すみません」

すみませんじゃねー！！　何平然と学園長にお茶いれさせてんの！？　まだ弘美様は孫だとしてあんた誰だよ！？

「？　何してんだ？　美幸も座れよ」

いやいや！
半ば混乱しながら学園長を見るとにっこり微笑んで頷かれた。う…す、座ります。

「し、失礼します」

というか、学園長室には来たことあるけどこっちの応接間はよく考えたら来たことない。き、緊張するなぁ。

「はい、どうぞ」

「あああありがとうございます」

「ありがとうございます」

「……」

お茶を受け取るも、慌ててお礼を言う私、いつも通りの皐月様、ガン無視な弘美様と三者三様だ。ていうかアウトロー感がハンパない。

一瞬おば様からされた何この子？みたいな疑問顔が頭から離れなくて冷や汗がとまらない。今は弘美様を心配そうに見て私とかアウトオブ眼中だけど。

「ん、はぁ。美味しいです」

「ありがとうございます」

おっさんか、という勢いで一気飲みした皐月様は終始笑顔の学園長と笑いあってから、繋いだままの手を弘美様の太ももの上でとんとんした。

「ほら、せっかく学園長がいれてくれたんだから弘美も飲めよ」

「……うん」

手を伸ばした弘美様の手は、誰が見てもわかるくらい震えていた。

「……ん」

「美味しい？」

皐月様は弘美様を向いてるから顔は見えない。顔を覗き込みたくなるくらい優しい声で問い掛ける皐月様に、弘美様はほぅと息をついた。

「…うん。美味しい」

震えはとまったように見えた。固まっていた表情も僅かに緩まり、空気もほぐれてほっとする。

「そうか。じゃあ、話せるか？」

「うん……あ、あの…ま……ママ、ヒロ……ヒロのせいで、パパ、死んじゃって…ごめんなさい」

「弘美のせいじゃない、とは言わないわ。言っても弘美は納得しないでしょう。弘美が風邪をひいたことは原因の一つだわ」

「っ…」

「でもね、弘美はひきたくて風邪をひいたわけじゃないでしょう？だから弘美に責任はないわ」

「でもっ」

反論しようとする弘美様におば様は手の平を向けて制する。弘美はぐっと唇を閉じた。

「というか、一番悪いのは事故を起こしたパイロットだもの。本人死んで、会社も偉い人がやめたり賠償金だしたりして責任をとったわ。パイロットだって会社が働かせすぎたのか、もしかしたらパイロットの個人的事情で疲れてたとか、色々原因はあるわ。誰か一人が悪いと犯人にはできないの。それは弘美にもわかるわね」

「……わかる、けど、気持ちとして…」

「うん、だからね、弘美も原因としましょう。パパを殺した原因の

一つ。で、許します」
「……え」
「いや、そんなに驚かれても。話聞いてたならわかるでしょうけど、私、弘美のことあ…愛してるわ」
急に照れたらしく、顔を赤くして視線を泳がせつつおば様はそう言った。
「ママ…」
「だから気に病まないで。すぐに今まで通りとはいかないかも知れないけど、もうあなたは事実を受け入れられるくらいに大人になったって信じてるわ。今まで嘘で隠していてごめんなさい」
「ううん…違う。ママは隠してたんじゃなく、ヒロを守ってたんでしょ。ありがとう。今まで、ごめんなさい」
おば様がぐす、と鼻をすすった。ぽろぽろと涙をこぼした。大人の女の人がこんな風に泣くなんてドラマでしか見たことがなくて、何故かいたたまれなくなる。
「弘美、行かないのか？」
「……行く」
「いい子だ」
皐月様はぽんと弘美様の頭を撫でた。弘美様は立ち上がり、名残惜しむかのようにゆっくり、ずっと白くなるまで握っていた皐月様の手を離した。
「ママ」
弘美様はおば様の隣に立った。

「言葉だけじゃ、なんとでも言える。私はまだ、ママを信じきれない」
「ひ、弘美…」
「だから、信じさせて」
「何をすれば、信じてくれるの？」
「私を…愛してるなら、１００％愛してるなら、ヒロを抱きしめて。力いっぱい、信じられるくらい抱きしめて」
「弘美！」

言葉が終わらないくらいで感極まったおば様はソファから勢いよく立ち上がり、まだソファに片足を残したまま隣に立つ弘美様を抱きしめた。

「うぅぅ、ごめん、ごめんなさい。弘美、弘美弘美、愛してるぅ。ずっと…あなたを抱きしめたかった。大きく、なって、本当に……嬉しい。愛してる。世界で、一番、愛してるっ」

泣きながらおば様はすがりつくように弘美様を抱きしめて、弘美様の体が持ち上がるほど強く抱きしめた。

「ママ…」

弘美様はおば様の胸に顔をうずめる形になっているから、声がくぐもっているけど、それでもよく聞こえた。

「う、うううぅ…うわぁぁぁ！」

大きな声で子供みたいに泣く弘美様は、いつもの暴君な面影なん

てまるでなくて、ただの小さくて弱い女の子だった。

しばらく二人の泣き声が応接間に響いた。数分、私はただ弘美様を見つめていた。

二人は泣き止むとギクシャクした動きで抱き合うのをやめた。

今まで距離をとっていたらしいし、弘美様の性格的にも当分ぎこちないままだろうなぁ。とても微笑ましい。

「み、見苦しいところを見せて、ごめんなさいね。あと、ありがとう、皐月さん」

少し照れたようにはにかんでからおば様は皐月様を向いてそう言った。

「皐月さんがいなければ、私は弘美をずっと子供扱いして、いつまでも嘘をつき続けていたわ。本当にありがとう」

「そんな……俺はただ、自分がやりたいようにしただけですよ」

「そうね。私もあなたが部屋を出ようとした時はどうしてやろうかと思ったわ。手元に適当なものがあれば確実に投げてたわね。なくてよかったわ」

それはわざわざ言わなくても良いことです。おば様、顔はあんまり似てないけど弘美様とやっぱり似てるんだなぁ。あ、逆か。

「皐月様」

すすすとこれまたはにかみながら弘美様が元の席、皐月様の前に移動した。ていうかはにかみ弘美様とかめちゃくちゃ可愛い。とても年上には見えない。くぅぅ、私もこんな顔されたい。

「どうした？」
「…ありがとう。お、お姉ちゃん、愛してる」
かっ…可愛い！！！
う、わあああ、可愛すぎるでしょ！　なに今の！　可愛すぎて鼻血でそう！！
弘美様の満面の笑顔に悶えそうになるのを堪えていると、皐月様はにっこり笑って弘美様を撫でた。
羨ましいぃぃぃ！
「俺も愛してるよ」
そして弘美様の頬にキスうぇぇぇい！？　ホワイ！？　なに！？
ここ欧米！？
「えへへ、うん、知ってる」
弘美様は照れつつも皐月様にキスを仕返した。え、なに？　この二人付き合ってんの？　なにさらっとキスしてんの？　え？　なにこの状況。
「…ひ、弘美、その…ママにもキスしていいわよ？」
「え…恥ずかしいし……」
「……」
皐月様には恥ずかしくないのかよ！？　え、つまり二人の時はちゅっちゅっちゅっちゅっしてるからキスは恥ずかしくないってこと！？
「…まあ、どうしてもって言うなら、いいけど……」

「ど……ど…うぅ…や、やっぱりいいわ」
「弘美」
「う、だ、だって、皐月様はべたべたしてくるから慣れてるけど、ママは、慣れないから、は…恥ずかしい」

この親子、じれったいなぁ。見ててにやにやする。
ふと弘美様目があった。豹変して睨んできた。

「美幸、何にやけてんのよ、キモい」
「ぐ……ひ、弘美様、ちょっとくらい私にも笑顔を見せてくれてもいいんですよ？」
「は？　あんたに笑う理由がないわ。脳みそ腐ってんじゃないの？」
「……」

くっっそぉぉぉ……さっきの綺麗な弘美様を所望する！　ていうかツッコまなかったけど途中自分のこと『ヒロ』とか言って極めつけに皐月様に『お姉ちゃん』とか可愛すぎるだろぉぉ！！　私にもお姉ちゃんって言えよ！！

「弘美、口が過ぎるわよ」
「うー」

拗ねてる顔も可愛い……ていうか弘美様が可愛すぎて何かちょっとドキドキしてきた。
はっ！　……もしかして、恋！？

「美幸？　なんか変な顔してるけどどうかしたか？」

皐月様うるさい。

○

皐月様が弘美様と仲がいいのは納得した。仲がいいのは結構だ。皐月様のおかげで弘美様はおば様と仲直りできたんだし、そりゃあますます仲よくなるだろう。

でも納得できない。

「こんなことくらいでない胸はってんじゃないわよ、あんたアホなの？」

なんで私にはいまだにツン全開なんだ。さっきまで笑顔で皐月様と電話してただけに凄い不満。皐月様が特別なのはわかってるけど、ちょっとくらい、優しくならないかな。

「うう…でも今までよりずっと仕事できるようになってます。褒めて下さい！」

「私、スパルタなの」

「私は褒められて伸びるタイプなんです。そうだ。『ヒロ、美幸お姉ちゃん大好きっ』て言って下さい。そしたらやる気１００倍になります」

「キモい」

「……」

うぅぅーっ。私だって、結構頑張ってるのに。先輩方がいなくな

った分超頑張ってるのに。
「てかそろそろ新入生見繕った？」
「あ」
忘れてた。い、いや。でも新学期始まったばかりだし。まだ部活入ってない子とかいくらでもいるよね。
「はぁ。最近頑張ってると思ったら相変わらず抜けてるわね、前しか見えないとか猪みたいなやつ」
「！　今頑張ってるって言いました？」
「……あんた、あんまりそう言うと褒める気なくなるってわかってる？」
そ、そうだったのか。
「とにかく、優秀なのに限ってさっさと部活入ったりするんだから、早く行きなさい」
「え、えっと、急に言われても…」
いったい何を基準に選べば……顔？　まさか一番最初に挨拶した人にするわけにはいかないし、だからって闇雲に出て生徒を見てもパラメータわからないし。
「ほら、とりあえず新入生の成績上位者と生徒会経験者のプロフィール。気にいったのに声かけてきなさい」
「え…わ、私のために？」
「自惚れんな。私が楽したいからに決まってんでしょ」
私にはわかる。ちょっと目線そらしてるから照れてる！　てこと

は私のためだ！

「弘美様ー」

「うざい、近寄んな」

「またまたぁ」

「ちょっ、調子にのらないで。頭撫でるな！　あんた年下のくせに生意気よ！」

「弘美様が可愛すぎるからいけないんです！　だから撫でます！」

「……あんたには呆れるわ」

あんまりやって怒られたら困るので3撫でくらいで我慢しておく。

……なんだか、本気で弘美様のこと好きな気がする。撫でただけでちょっとドキドキしたし。……まさか私がロリコンとは。

「じゃ、早速成績が一番な子のとこ行ってきます」

「行ってらっしゃい」

顔は可愛いなぁ。どんな子だろう。目つきするどいけど、できれば優しい子がいいなぁ。

私はわくわくしながら立ち上がった。弘美様は何故か苦笑していた。

ああ、苦笑も可愛いなぁ！

○

会長様はちび５（後書き）

読んでくださりありがとうございました。次世代ということで、本編では影も形もなかったキャラクターをメイン視点にしました。この後美幸は学年トップのクールショートカット少女とその幼なじみのドジっ娘を連れて帰りますが、それはまた別のお話…とかなんとか。

展開自体は前から考えてたのですが、話を聞く経緯や母親のキャラ、聞かせて説得する台詞とかは全く考えてなかったので時間がかかってしまいました。
説得されたのは、ようは弘美が頭がいい、というか大人だったからです。皐月の考えているシナリオを察してそれに従ったところが大きいです。手を離したとことかそうです。

次は二度目の私の番外、葉子のその後の話を書く予定です。１１月くらいに。

雨の中で（前書き）

二度目の私の葉子を主役にしたその後の話です。といいつつ葉子視点ではないですが。

雨の中で

雨が降っている。何だか憂鬱だ。特に理由はないけど、荷物濡れるしくせ毛がはねるし、あ、理由あるか。

傘。新しい水玉の傘。買った時はうきうきしていたけど、いざ使う段階になると憂鬱だ。

今日は水曜日で、午前中は丸々朝会でその分7時間目まである最悪な日だ。ただでさえ憂鬱な水曜日に雨が降るなんてホント最悪。

「行ってきまーす」

朝は慌ただしく、親は弟や妹の世話に手をとられていて私の挨拶に返事を返す人はいない。

別にいいけど、今更だけど、お姉ちゃんだからとちょっと放置しすぎじゃないかな。いいけど。

じゃばじゃばと玄関脇の下水道の穴が音をたてている。昨夜からの雨はわりと強くて、今日も一日続くらしい。

いつもショートカットに横切る公園の入口を今日はスルーして真っ直ぐすすむ。泥はねはできるだけ避けたい。

ぶるぶると左胸の下が震えた。内ポケットの携帯電話だ。取り出して開くと、普段駅の一つ手前で待ち合わせて一緒に登校する友達からで、先に行くという内容だった。

ちぇっ。

仕方ないけど何だかつまらなくて内心でふてくされ、返信しようとした時、視界のすみに足が見えて携帯電話の画面から顔をあげた。

公園の柵に腰掛けて、女の人が傘もささずに空を見上げるように

顔をあげ、目を閉じていた。
思わず立ち止まる。
「……」
すごく、変な人だ。でも変と思うより先に綺麗だと思った。すごく綺麗な女の人で、まるで絵画のようで、何かの撮影かと一瞬思って周りを見渡したけど、なにもない。やっぱりただの変な人だ。
いくら綺麗でも、女の人でも、こういう人は無視に限る。学校に行かなきゃいけないし、関わってる暇はない。
「あの…」
なのに気づいたら、私はその人に傘をさしだしていた。
「風邪、ひきますよ」
ゆっくりと目が開き、顔がこちらを向いた。正面から見つめられると何だかドキドキした。あんまりに綺麗な人で、恐いくらいだ。
「馬鹿は風邪をひかないから、大丈夫。あなたこそ、風邪をひく」
平坦な感情の読めない声で、氷のように冷たいけど、内容は私を気遣うもので、彼女は私の傘の先を押し返した。
ぽたぽたと手をかけた場所から雫が落ちて、彼女のジーパンの膝を濡らした。
「馬鹿って……あの、とにかく、風邪ひきますよ。駅までなら送りますけど」

「ありがとう。でも大丈夫」

いら。ちょっとムカついた。顔がひきつったのを自覚して無理矢理笑ってみせる。

「いいから。送ります」

「いらない。あなた、ちょっとしつこい」

かすかに機嫌の悪そうな調子で女の人は私を見た。無表情からわずかに眉をよせている。

その態度に気圧されて、私は口をつぐむ。女の人はそんな私を見てすぐに顔をあげた。真っすぐに目を開けたまま、女の人は虚空を見てる。

「……何してるんですか？」

ちょっと気になった。頑なにここから動かないのは、誰かを待っているのか。

「……雨」

女の人は目を閉じて、私を見ないまま口を開いた。

「雨？」

「気持ちいい」

雨にうたれるのが気持ちいい、という意味だろうか。

「……」

黙って目を閉じ空を仰ぐ、その姿は、やっぱり綺麗だった。
変だと思う。自分でも変だと思う。思うのに、私は傘を閉じていた。

「隣、いいですか？」
「……好きにすればいい」

女の人はちらっとだけ私を見て、また目を閉じた。
私はその隣に座って、真似をして顔をあげて目を閉じた。

「……」

冷たい雨が容赦なく降り注ぐ。
髪が重くなり、瞼に落ちた雨が涙のように流れ、唇の上で跳ねた雫は顎を伝う。ブレザーから露出してるシャツの胸元が濡れて張り付く。
冷たい。
そろそろ冬服が熱くなる4月の雨は、冷たくて気持ち良かった。
スカートが重くなり、靴下までびっしょりしてきた。体温が下がるのを感じる。それが、どこか非現実的だ。目を閉じているせいだろうか。お尻の下の柵の固さと鞄の重みだけが私を地上にしばりつける。

「……っくしゅん」
「……寒い？」
「あ…すみません」

くしゃみが出て、反射的に身震いした。声をかけられて目を開けると無表情な瞳が私に向けられていて思わず謝る。

「……」
「え？　あ、あの…」
これ以上邪魔をするのははばかられたし、何より遅刻してしまう。だからお尻をあげたのだけど、何故か女の人も立ち上がり私の手を掴んだ。
私より長くいた彼女の手は当たり前だけどすごく冷たくて、氷のようでドキっとした。
あんまりに綺麗で冷たい彼女は、まるで雪女みたいだ。なんて思う私は、少し子供っぽすぎるのだろうか。
「風邪ひく」
女の人は私の手をひいて歩きだした。触れた手から体温を奪われているようで何だかぼんやりしてしまう。現実味のない私は逆らわずに黙ってついて行った。
「あがって」
氷の国のお城にでも行くのだろうかと思っていたが、当たり前だけどそんな訳はなく、マンションへ連れて行かれ、2階の角の部屋のドアを開けて促された。
「あの、私…が、学校に行かなきゃ…」
玄関口で手を離された私はようやく意識をとりもどし、一歩後ずさった。
何をしているんだ、私は。名前も知らない変な人にのこのこ着い

てきて。とっくに遅刻も確定だし、何よりびしょ濡れだ。
がーっと頭の中が混乱し、後悔したけど遅い。どうしよう。泣きそうだ。

「今日、テスト？」
「違います、けど」
「なら、乾かすといい。あがって」

彼女はまた私の手をとった。どこにも強引さはなくて、むしろゆっくりした上品な動作だったのに、避けられなかった。彼女が私を見つめると見とれて動けなくなる。
触れられた手が、何故か熱をもった。
私は魔法にでもかけられたみたいに、さっきまでの後悔や焦りや警戒を消して、頷いて促されるまま部屋に入った。

○

「はい」
「あ、ありがとうございます」

リアルなイルカが描かれたマグカップを受けとった。熱いくらいのマグカップには真っ黒なコーヒーが入ってる。
下着もシャツも借り物のせいでとても居心地が悪い。お風呂まで

一緒に入ったし今更だけど、ズボン履いてないのもちょっと恥ずかしいし。

「……」

小さな丸テーブルを挟んで向かいに座っている。向かいでクラゲのマグカップでコーヒーを飲む白い喉が上下するのを見ていたら、自然と視線が下がって胸の谷間を見てしまった。

大きいなぁ、とさっきも思ったけどまた思う。白くて、スタイルよくて、美人だ。ビックリするくらい美人で、同性でも見とれてしまう。

「あ」

「え…？」

「名前」

「え…え？」

「私、森下葉子（もりしたようこ）」

「あっ、ああ、すみません。私は下村美代（しもむらみよ）です」

突然名前を言われて混乱したけど、自己紹介をまだしていなかったことに気づいて名前を答えた。

すでに出会ってから一時間近く経過してるのに、今だに名乗っていなかったことに驚いた。というか私、名前も知らない人の家にあがってお風呂まで入ったのか。何をしているんだ。

「よろしくお願いします」

「よっ、よろしくお願いします」

マグカップを置いたと思うと森下さんはいきなり手をついて頭を下げた。慌てて私も下げたけど、いやなにこれ。どういう状況？

「美代、コーヒー、ブラック駄目なの？」
「あ、えっと…ちょっと、ミルクがあった方がいいかなー、なんて」
「ん」

私が口をつけていないことに気づいたらしい森下さん。無口で社交性なさそうだけど、意外と気遣いのできる人らしい。って、年上に言うのも失礼な話だけど。

立ち上がりキッチンに行った森下さんはすぐにミルクと砂糖片手に戻ってきた。また向かいに座り、それを渡される。

「ありがとうございます」

適量入れて飲む。はぁ、あったかい。
飲みながらちらりと森下さんを見る。

「……」

ぼうっとしているのか、それとも何か考えているのか。ただ黙って虚空を見つめる森下さんからの様子からはわからない。

「あの、森下さん」
「葉子でいい」
「あ…はぁ、えっと、葉子さん」
「ん」

沈黙が気まずくて話し掛けたらすぐに訂正された。結構フレンドリーな人みたいだ。ほっとしながらとりあえず話のネタを探す。

「葉子さんは学生ですか？」
「大学生。２年」
「私は高２なんで、３つ違いですね」
「そう」

興味がないのか、ローテンションだ。いやさっきからだけど。えっと。

「雨の日は、よくあんな風にしてるんですか？」
「たまに。美代は？」

お、食いついた？

「私は初めてです。結構気持ちいいですよね」
「ん。落ち着く」
「でも体調には気をつけてくださいね」
「大丈夫。馬鹿は風邪をひかない」
「いえ、自信満々なとこ悪いですけど、馬鹿も風邪ひきますよ」
「？」
「馬鹿は風邪をひいても気づかないだけです」
「でも私、滅多にひかない」
「…それは単に丈夫なだけです。てか滅多でもひいてるじゃないですか」
「なるほど」

……風邪をひかないはともかく、もしかしてこの人は本気で馬鹿なんだろうか。

ピーッ
機械音が響く。乾燥機の止まった音だ。勝手に行くのも居心地が

悪いので葉子さんの様子を伺うも、動かない

「あの」
「ん？」
「いや、えっと、乾燥機止まったみたいなんでとりに行きますね」
「まだ」
「へ？」
「ブレザーはまだ」

ブレザーは回る乾燥機ダメ、と主張する葉子さんにより布団乾燥機的に熱風を送り込むタイプの室内乾燥機を押し入れから出してまでしてくれてる。

「古いからちょっと時間かかる」
「はあ…あ、でもまあブレザーは肌に触れないですからちょっとくらいしけっててもー」
「急いでる？」
「……お言葉に甘えます」

別に責められてるわけでも、執拗に引き止めようとされてるわけでもなくて、ただの疑問なんだろうけど、なんというか、じっと見られるとノーと言いづらい。

「そう。コーヒーいる？」
「お願いします」

○

「美代、今日は災難だったねー。つかどうせならサボればいいのに」

車に泥水をかけられて遅れて行くからごまかしといて、とメールでお願いしていた幼なじみの彩華（さいか）が軽ーくそんなことを言う。

ちょっと呆れるけど彩華はたまにサボってるプチ不良さんだから仕方ない。そんな彩華だから気楽にごまかすのも受けてくれたわけだし。

彩華が私と普段登校する相手で、幼稚園からで何だかんだでつるんでいて長い付き合いで仲がいい。

「サボらない。彩華と一緒にしないでよ、不良娘」

「へいへーい、一緒に悪落ちしようぜ。ていうか私の方が成績いいし」

「急にマジにならないでよ。悲しくなるから」

彩華はサボってるしろくにノートとらないくせに、私のノート写して私よりいい点とる。美代は要領が悪いんだよと笑いながら言われた時は頬をつまみあげてやったけど、ちょっと根に持ってる。

「にしてもホント、泥かけられるとか朝から最悪だよね」

「う、うん」

最悪、か。実際には泥を被ったのでもないし、自分から濡れたのだからちょっと違う。

「雨、早くあがんないかな」
「そうだね」

いつもなら無条件に同意できるけど、今日はちょっとだけ、雨もいいかなと思った。
思わぬ出会いがあるなんていうのは漫画の中だけだと思っていた。実際に起こるとなんだか新鮮で、まだ余韻を引きずっている気がする。

あれから結局、私はシャツやスカートにアイロンまでかけてもらってから家を出た。めちゃくちゃマメな人だった。
美人で無口で変わってて、何だか側にいるととても気になるというか、引き込まれるような不思議な雰囲気のある人だ。

葉子さん、か…。

印象的な出会いで、ドキドキした。とはいえ、もう会うこともないだろうなぁ。家は知ってるけど、会いに行く理由なんかないし、向こうも迷惑だろうし。

せっかく出会ったんだから、メルアドくらい聞けばよかったかな。今更遅いけど、何だか急に後悔した。
もうあの不思議な人との接点がない。雨の日だけの特別な一瞬の出来事で、それはもう終わったのだ。そう思うと、少し寂しい気さえした。戸惑い、一時は何でついて行ったんだと自責さえしたくせに、今になってもっと関わりたいと思えてきてしまう。
だってきっと、あんな出会いは私の人生にそうそうないだろう。もう二度とないかも知れない。それを無為にしてしまった。

「なーんか美代暗くない？　ま、朝から雨ふって汚れてりゃ当たり

前か。そだ、放課後気晴らしにカラオケ行かない？」
「あ、んー…そうだなぁ、今割引してるとこあったっけ」
いつまでも引きずっても仕方ない。彩華の提案にのって気持ちを切り替えようかな。
私は答えながら携帯電話を…
「あれ？」
「ん？　どしたの？」
「携帯……ない」
「え、マジで？　どっか落とした？」
「…忘れてきたかも」

○

雨の中で2

私は朝ぶりに、もう来ないだろうと思っていたマンションに来ていた。携帯電話を取りに来たのだけど、当然アポなしだし、何だか無性にドキドキする。

とりあえずインターホンを……部屋番号、何番だっけ？

「……」

やばい。完全に見てなかった。2階の角だから201？でも逆から数えてるかも。うーん……あ、ポスト見ればいいのか。えっと、うん、201で合ってる。

私は意を決して201と押して呼び出す。

数秒待つとボタンの上の小さな画面に葉子さんが映った。

「……開ける」

切れると同時に鍵が開く音がして、私は慌ててドアを開けた。マンションを尋ねるのは実は初めてだ。友達の家でも一人ではないからいつも他の人がやっていたし、緊張したがなんとかなってほっとした。

ドアの前に立ち、インターホンを改めて押そうとするとその前にドアが開いた。

「入って」

「は、はい。お邪魔します」

促されるまま、朝のリプレイのように傘立てに傘をいれて靴を脱

ぎ、部屋へと入る。

「コーヒーいれる」
「あ、あの、私、携帯電話を」
「知ってる。机」
「あ、ありがとうございます」

言われて見れば机の上に私の携帯電話はおいてあった。目の前なのに気づかないとか、どれだけ緊張してるんだ。
少し自分で呆れつつ携帯電話をとる。迷惑メール2件と彩華からのメール1件がたまっていた。

「ん」
「あ、ありがとうございます」

コーヒーをだされた。すぐに帰るつもりだったはずなのに、葉子さんを前にするとちっとも普段通りではいられなくてペースを崩されてしまう。でも、葉子さんのゆったりしたペースに巻き込まれるのは嫌いではない。

コーヒーを飲んでぽつぽつと会話らしきものをしているとすぐに時間がたってしまった。

「買い物に行く。美代も帰った方がいい」
「そう、ですね。はい、長らくお邪魔してすみません」
「別にいい」

名残惜しかったのだけど、今度こそ忘れ物がないように確認をして私と葉子さんはマンションを出た。

「じゃ、また」

別れ道で葉子さんは軽くそう言った。

また、だなんて再会を匂わせることを言われて、我慢できなくなった。

「あの！」

「ん？」

歩きだす葉子さんを回り込む。葉子さんは不思議そうに首を傾げた。

「よかったら…メルアド、交換しませんか？　これも何かの縁っていうか…」

「いいよ」

「い、いいんですか？」

「友達はメルアド交換するもの」

「友達…」

朝に会っただけで、私はもう二度と会わないだろうと勝手に思っていたのに、葉子さんは友達だと思ってくれていた。それは、なんだか、とてもくすぐったくて……

「？　友達、嫌？」

「いえ！　…う、嬉しい、です」

うん、嬉しい、かな。友達だなんて、改まると恥ずかしいけど。これからも葉子さんに会えるのだと思うと指先がむずむずするような、なんだか不思議な感じだけどとにかく嬉しい。

メルアドを赤外線で交換した。『森下葉子』と表示された画面を見るとにやけてしまいそうになるのを堪えつつ葉子さんと別れた。

○

「う〜〜ん…」

お風呂をあがってベッドに寝転がりながら、携帯電話を開いては閉じ、開いては閉じる。

開く。アドレス帳を開いてま行を見る。

「……」

葉子さんにメール、しようかなぁ。と思いつつ、携帯電話を開いて閉じては寝返りをうってしまう。

「あー…」

したいかしたくないならもちろんメールしたい。でも迷惑かも、とか馴れ馴れしいと思われるかも、とかネガティブな想像をしてしまってイマイチ踏ん切りがつかない。

今までなら誰が相手でも、内容には迷っても送ること自体は迷わなかったのに。

葉子さんは今まで私の中にあったカテゴリーの全てにあてはまらない。どんな反応をするのか全く予想がつかなくて、何だか腰がひけてしまう。

「……い、いよしっ」

メール、打とう。大丈夫。友達って言ってもらったし、大丈夫。まさか嫌がられないはず。

『今日は本当にありがとうございました。これからよろしくお願いします。またメールしますね』

「…こ、こんなものかな？　……」

うーん。内容は別に変じゃないし、絵文字も無難にしたけど……、ええい、ままよ！　送っちゃえ！

私は目をつぶって携帯電話のボタンを押した。

「……」

…う、あー、返信早く来ないかなぁ。いや、さすがに1分立たずにってのはありえないし、気づかないって十分ありえるし、普段なら待ったりしない。

でも気になりすぎて他のことが手につかない！

「……」

……とりあえず、トイレ行こう。携帯電話は置いて、時間つぶさなきゃ。

ブブブ

「！」

机に置いた瞬間携帯電話が震え、私は浮かしかけた腰を下ろして慌てて携帯電話を開いた。

返事きた！

『よろしく』

めちゃくちゃシンプルな単語のみのメールだった。

でもなんかやばいくらいにやける。よろしく、だって。すぐ返信くれたし、嫌がられてないしむしろ歓迎とかは言いすぎ？　でもでもとにかく！

「…ぅへへ」

嬉しいなぁ。

葉子さんは嫌なことはハッキリ言う人だろうし、いっそ私からガンガン会いに行っちゃおうか。積極的にメールなんか毎日送っちゃったりして。

そうしたら仲良くなれるだろうか。そうなれたらいい。とても綺麗な彼女が微笑みを向けてくれることを想像すると、それだけで嬉しくなる。

「…はぅぅ」

にやけながらベッドに転がる。

葉子さんと仲良くなりたい。葉子さんのことを、知りたい。

○

「こ、こんにちはっ」
「こんにちは」

緊張しながらした挨拶にも平然と葉子さんは応えてすぐに鍵をあけてくれた。

学校が終わって、何となく暇で、思い切って葉子さんに暇だし行ってもいいかとメールしたらＯＫが出たのだ。

部屋の前まで来たのでベルを押すと、メールが来た。『入って』

「お、お邪魔しまーす」

自分でドアを開けて入るのは妙にドキドキした。中に入ると、葉子さんはソファに座って何かを書いていた。

「こんにちは」
「あ、はい、こんにちは。お邪魔します」
「好きにして」

それだけ言うと葉子さんは顔を下げた。向かいに座る。葉子さんが持ってるのはスケッチブックだ。絵を書いているのか。

かりかり、しゃっ、と鉛筆が走る音をBGMに、ぼんやりとその様子を見つめる。

「……」

「……」

どれくらい時間がたっただろうか。

「…ん、美代」

「え、あ、はい？」

「まだいて大丈夫？」

「え……あ」

ふいに顔をあげた葉子さんに我に返り、時計を見るともう夕方の6時半だった。我が家では19時夕食なので、そろそろ帰る時間だ。

それにしても、いつの間に2時間以上も経ったのか。全く自覚がない。ただぼんやりと葉子さんを見ていただけで、退屈だとか思う間もなく、一瞬で時間が過ぎてしまった。

私は驚いて、時計を三回見直したけど、時間は変わらない。

「もうこんな時間……あ、なんか、すみません、長々お邪魔しちゃって」

「いい。むしろ、ごめん。コーヒーくらい、出すべきだった」

「い、いえ！　そんな！」

「退屈な思いをさせた」

「いえ。自分でも不思議なんですけど、退屈だとは思わなかったんです」

「…そうなの？」
「はい」
葉子さんはじっと、私の言葉の真偽を計るかのように私を見てくる。そして一つ頷いた。
「…そう。ならいい。私はあんまり、気をつかうの得意じゃないから、何かあったらすぐ言うといい」
「ありがとうございます。でも、本当に大丈夫です。葉子さんといると、なんだか不思議と時間の流れがおだやかというか……とにかく、退屈なんかじゃないです」
「……ん。で、時間は？」
「あ、そ、そうでした。えっと、じゃあそろそろ帰ります」
立ち上がって鞄を持つ。葉子さんも立ち上がり、私を玄関まで送ってくれた。
「じゃ、また」
「はい！　…あの、明日も、来て、いいですか？」
「構わない」
「やった！　あ、すみません。えと、さよなら、また明日です！」
「ん」
素で喜んだのが声に出てしまって、私は恥ずかしくて時間は大丈夫だけど駆け足でマンションを出た。
「……はぁ」
エレベーターを待つのももどかしく階段を駆け降り、外に出てから私は息をついて歩調を緩めた。

……また、明日も会う約束をしてしまった。嬉しい。嬉しいけど、ちょっと強引だった気がしないでもない。でも嫌がられてはない、よね。

自分でもどうしてかわからない。けど、葉子さんがとても気にかかる。

恋とか、憧れとか、そういうのとは何か違う気がする。

大人っぽいし憧れてはいるし、好きか嫌いなら好きだけど、そうじゃなくて。わからないけど、葉子さんがとても大きな存在に感じて、近づきたくて仕方ない。近づけるのが嬉しい。

この気持ちはなんだろう。

わからないけど、私はとにかく嬉しかった。明日が楽しみだと、遠足前日の小学生のような気分で、意味もなく私は走って家に帰った。

○

雨の中で3

葉子さんと出会ってから2週間が経過した。何だかんだで殆ど毎日お邪魔した。

一度お友達の方もいらっしゃったりしたけど、基本二人で黙っている。葉子さんは絵を描いたり本を読んだりしていて、私にも薦めてくれるから半分くらいはそうして、あと半分は葉子さんを見てる。

じっとただ見る私を変な人だとは思わないでほしい。だって葉子さんを見ているとそれだけで落ち着くし、時間を忘れて見入ってしまうのだ。

葉子さんがあんまりに綺麗で、私にとっては美術品を見ているかのようなものだ。私にとって葉子さんは動く彫刻なのだから、見てしまうのは仕方ない。

コーヒーをいれたりするのも私の仕事になり、大分馴染んできた。

そんなある日。

「それじゃあまた、明日はお昼過ぎにでもお邪魔しますね」

「明日は、一日、暇？」

「え、はい」

というか暇だから午後に入り浸る予告をしたのだけど？　葉子さんとの会話は少ないだけに、今だに何を言いたいのかイマイチわからないことが多い。

「じゃあ、朝１０時、来て」

「わかりました」

何だかよくわからないけど、来いというならもちろん来る。本当は最初から午前中にお邪魔したいくらいだったので望むところだ。

とはいえ、何か特別な用事だろうか。

「何か持ってくものとかあります？」

「ない」

葉子さんの言葉は簡潔で無駄がない。だから、ないというなら私が気にかけることは何一つないということだ。だから私は頷いた。

「わかりました。明日１０時ですね」

「ん」

どういうつもりなのか、何処に行くのか、私には全然予想すらつかない。でもただ、朝から葉子さんと会えるのが嬉しくて楽しみだった。

○

うきうきと弾む心を表すように自然と足どりも軽く、私はスキップもどきなくらいに跳ねるように機嫌よく葉子さんの元へ向かっていた。

この角を曲がればあと一本向こうの角に葉子さんのマンションがある。小道なのでそこまで約一分。今は１０時の３分前なのでこの

ペースならちょうど10時にインターホンを押せるはずだ。
今日は何にしようかなぁ。昨日カフェオレだしたまには葉子さんの真似してブラックにしようかな。
「！」
そんな予定をたてつつ角を曲がると、マンションの前に葉子さんが立っていたのが見えて、私は慌てて走り出した。
「よっ、葉子さん！」
「ん……」
振り向いた葉子さんの元へ駆け寄る。葉子さんが待っててくれたことが嬉しくてにこにこしてしまう。
「おはようございます！」
「おはようございます」
挨拶を返してくれた、のはいいんだけど何故か頭を撫でられた。
今まであんまり触れたりしてないのでちょっとどきっとしたけど、なんか嬉しい。何となく褒められた気がする。私はあんまり人に頭を撫でられなかったからか、妙に嬉しい。
「えへへ、なんですか？」
「ん、なんでもない」
笑いながら尋ねると、葉子さんはぽんぽんと二度私の頭に手を置くように優しく叩いてから手を下ろした。
あ、残念。聞くのはもうちょっと後にすろばよかった。

葉子さんはくるりと私に背を向け、顔だけこちらに向けた。

「行こう」

「はいっ」

殆ど表情を変えない葉子さんは相変わらず無表情だったけど、なんとなーく機嫌がよさそうに見えた気がした。

そんな葉子さんについていくと駅に着いた。

「どこまでですか？」

聞きながら財布をとりだすも、葉子さんは無言だ。言わないということはまとめて買ってくれるのだろうから待つ。

「ん」

「ありがとうございます。３２０円ですね」

「いい」

「え？」

「お姉さんの、奢り」

「……」

お、お姉さん？　一瞬、え、誰のお姉さん？　葉子さんってお姉さんいたっけ？と考えたけど、文脈から推察するに、葉子さんの奢りということだろう。

確かに葉子さんは私より年上なのでお姉さんだ。間違ってない。でもそんなキャラだっけ。

「……」

「あ、待ってくださいよ」

無言で切符を改札に通した葉子さんの後を慌ててついていく。

葉子さんと電車にのる。当たり前だけど葉子さんが電車にのってる姿は新鮮で、意味もなく見つめてしまうけど、いつものことなので葉子さんは特に何も言わない。

「次降りる」

「あ、はい」

そうしてるとあっという間だ。まあ元々３２０円区域で近いのはわかってたんだけど。

葉子さんの斜め後ろをついて行く。最初に一度不思議そうにした葉子さんだけど特にツッコミもないので好きにさせてもらってる。だってちょっと下がった方が葉子さんの後ろ姿が見えるんだもん。隣だと葉子さん見てたら前見えなくて危険だ。

「あ、水族館ですね。ここが目的地だったんですか」

「？　知らなかった？」

「え、いや、そりゃ、聞いてないですし」

「そう…」

？　葉子さんたら何で私が水族館に行くと知ってると思ったんだろ。あ、そういや駅の出口にでかでかと水族館の看板あったし、察しろってことか。葉子さんの頭の中を察するのは難しいなぁ。

「高校生一枚、大人一枚」

「ありがとうございます」

おっと、葉子さんの顔を見すぎて窓口に行ってることに気づかなかった。私は近寄りながら財布をだす。

「いくらですか？」

「いい」

葉子さんは私にチケットを渡しながら首を横にふった。

「え、いやでもさすがに」

「いい。私に付き合わせて、悪いから、お礼」

「いやいや！　私なんて葉子さんといられるだけで嬉しいですし。悪いなんてそんな、私がお金を払いたいくらいですよ」

いやマジで。葉子さんの美貌の拝観料として１０００円くらいなら払ってもいいくらいだ。

「……」

また頭を撫でられた。ごまかそうとしてるのだろうと思ったけど、撫でられるのは嬉しいので黙って目を細めて堪能する。

「……じゃ、そういうことで」

「は、はい、わかりました。とりあえず今日はお言葉に甘えます」

どういうことかわからないけど、あんまり年上の提案を執拗に断るのも失礼なので了承した。今度何かお返しすればいいよね。けして頭を撫でられた心地よさから思考放棄したわけじゃない。

中に入ると、思ったより人がいた。水族館って凄い地味ーなイメ

ージで小学生以来だけど、休日だからか以外と家族やカップルがいて混んでいた。

「美代」

突然、葉子さんが私の手をとった。手を繋ぐのは出会い以来でどきっとした。

「え、は」

「はぐれる」

ほうける私に葉子さんは淡々と言って、手をひいて歩きだした。

人込みの中大きな水槽の前をいくつも通過するけど、葉子さんはまっすぐ前を見ていて、水槽には目もくれない。

しばらく歩いてようやく足をとめた葉子さんは、ぽつぽつと壁に埋め込まれるようにある水槽を覗きこみだした。

「このクラゲは一」

と、突然葉子さんは水槽を見つめたままクラゲの説明を始めた。いつものトーンだけど興奮してるのか、まるで何かを朗読してるかのように長々と語っている。

私は何を言ってるのかわからなかったし、クラゲとか全然興味ないから、水槽の中がクラゲかも確認せずに照らされる葉子さんの横顔を見ながら、普段あまり聞けない葉子さんの声音を堪能することにした。

内容は聞き流して葉子さんのまっすぐな声をただただ聞いている

と、なんか、ふにゃーってなる。ふわー？　ふらーかも知れない。よくわかんないけど、なんか幸せな気持ちになる。

「っていう。……つまらない？」
「へ？　いやまさか。もっと聞きたいです！」
「そう」

葉子さんと手をつないで、葉子さんの声を聞きながらじっくりとクラゲの水槽をまわった。
とても有意義な時間だった。気がついたら昼の3時を過ぎていて、気づいた葉子さんが遅れたけどお昼にしようと提案した。

○

例によってまたまた奢られてしまった。年上とはいうけど、葉子さんだって学生でバイトもしてないのに。
葉子さんの食べ方は何気に綺麗だ。それでふと思ったんだけど、葉子さんってお金持ち？　マンションも綺麗で駅近いし、服も地味にブランドじゃない？　ブランドよく知らないけど。

「葉子さん、葉子さんってお金持ちなんですか？」
「別に、普通」

ストレートに聞いてみたけど普通だったらしい。なんだ。まあお

金持ちのお嬢様が私みたいな小娘を部屋にあげたりしないか。

ご飯を食べてから、今度はクラゲ以外をぶらぶらする。クラゲ以外には興味がないらしく静かな葉子さん。

なので葉子さんの手の感触に集中してみる。やや体温は低め。柔らかい。

「イルカってあんなに飛ぶんですね。私、テレビでしか見たことないからなんかびっくりしちゃいました」

「そう」

「鳴き声は思ってたのと違いましたー」

「…美代」

「はい、何ですか？」

「楽しかった？」

「はい！　今日は本当にありがとうございます」

「ん。じゃあ、全部見たから帰ろう」

「え、まだお土産屋見てないですよ。食堂の横にあったやつです。見ましょうよ」

「わかった」

イルカショーを見てややあがったテンションのまま、葉子さんの手を振りながらお土産屋へ。

「あ、葉子さん葉子さん。クラゲのぬいぐるみがありますよ！」

「ん」

「そうだ。今日は色々奢ってもらっちゃったんで、クラゲのぬいぐるみプレゼントしますよ。葉子さんクラゲ好きでしょう」

「クラゲは好き。でもいい」

「いいからいいから」

む、結構高いな。ぬいぐるみって元々安くないけど、クラゲのは足がやたら凝ってるから仕方ないか。
私は葉子さんの静止を無視して卓上サイズのぬいぐるみをさっさとレジに持って行った。

「プレゼント用でお願いします」

うん、ばっちりだ。財布の中からお札が消えたけど、些細な問題だよね！

「葉子さん、お待たせしました。はい！　プレゼントです」
「…ありがとう、大切にする」
「！」

い、今、葉子さんが笑った…。うわ。今までも微笑みくらいならなくもなかったけど、普通に笑ったの初めて見た。
めちゃくちゃ、可愛い。黙ってたら死ぬほど美人で、笑ったら生き返るほど可愛いとか、葉子さん反則すぎる。

「ど、どういたしまして」
「ん。帰ろ」

葉子さんが再び私の手をとった。
笑顔にあてられてとろけたまま葉子さんの家に帰る。帰る途中、私はどうやってまた葉子さんを笑わそうかということだけを考えていて、手を繋いだままだと言うことに気づかなかった。

○

雨の中で４

「葉子さん、クラゲのどこが好きなんですか？」

水族館に行った次の日、私は家にあった海の図鑑を持って訪ねた。昨日はクラゲの説明を完全スルーした私だけど、葉子さんが好きだというならクラゲはきっと私が知らない魅力ある生き物なんだろう。

ていうか別にクラゲが嫌いなわけじゃないしね。生き物全般好きだし。昨日はただクラゲより葉子さんを優先しただけだ。

「……見た目？」

「疑問形で言われましても」

「ん。美代はクラゲ、どう？」

「私は今まで興味なかったですけど、葉子さんが好きなら私も好きになります。クラゲって美味しいんですか？」

「……食べられるクラゲは多くない。主にエチゼンクラゲやビゼンクラゲが食用。こりこりした食感でローカロリーなのが売り。和え物にしてお酒のおつまみなんかにされるのが多い。最近ではエチゼンクラゲが増えたことから食用化が進んでいる」

「へぇ、おいしそうですね。でも突然解説に移るってことは食べたことないんですか？」

「ない。クラゲは見るもの」

「あれ、じゃあもしかしてクラゲ食べるとか最悪！みたいな感じですか？」

「別に。仕方ない」

ふむ。クラゲ好きなわりにそこは割り切ってるんだ。まあ私だって鹿可愛いけど鹿肉食べたし、普通か。

「葉子さん」
「なに？」
「見てください。クラゲです」
「……」
「あれ、ちょっと。何とか言ってくださいよ」

図鑑をただ見るのも飽きたので、暇つぶしにとくれた私用のスケッチブックにクラゲの絵を描いた。超簡単にだけどケッコー可愛いと思うんだけどなぁ。

「か……か、かわ、いい」
「え、めちゃくちゃどもってるし、そんなの初めて見るんですけど」
「……」
「無理に気を使わないでくださいよ」
「……可愛くなくはない」
「つまり？」
「私の好みではない」

ハッキリ言われてしまった。むう？　でも可愛いは可愛いはず。なら単に葉子さんがクラゲ好きすぎてデフォルメとか邪道！ってことか。

「そういえば、葉子さんの絵って見たことないです」

見せて見せてプリーズとお願いすると、すんなりスケッチブックを渡してくれた。あんまり見られたくないかな、と思って今まで見せてと言わずにいたのは余計な気遣いだったらしい。

「……うわ」

表紙をめくって、本気で驚いた。
鉛筆でかかれたのはわかってる。白黒だし写真とは明らかに違う。わかってるのに何故か一瞬、本物だ、写真だと思ってしまった。
ふんわりした柔らかさとか立体感とか透明感とか、リアルすぎる。そんなわけないのに本物のクラゲに見える。めちゃくちゃ凄いうまい。なにこの人、ぱないわ。

「う、わ…うわ、め、めちゃくちゃうまいですね」

うますぎてちょっと引いた。天が二物与えすぎ。

「ん。よく言われる」

いつも通りだけど、どことなく得意げに見えた。可愛い。今のちょいっと頷いた仕種が可愛かったから絵がうまいのはどうでもいいか。
ぱらぱらーっと見ていくと、途中何枚か人の絵もある。それもなんかリアル過ぎてちょっとキモいくらいだ。写実的ってすごいけどなぁ。写真でいいじゃんって気がしてきた。葉子さんには言えないけど。

「ん？」

最後の一番新しい、書きかけっぽい絵も人間なんだけど、どっか見覚えがあるような……

「……ん？　もしかしてこれ私ですか？」
「そう」
「お、おおお…」

うわ、うわっ、なんかかなり嬉しいんだけど！！　私のこと描いてくれてるんだ！　てか葉子さんから見てこんななんだ！　結構可愛いじゃん！

「葉子さん葉子さん！　これ、できたらください！」
「……わかった」
「ほんとですか？　絶対ですよ？」
「わかった」

やった。部屋にかざろう。自分の顔かざるとかナルシストっぽいけど気にしない。あ！　てかこれ何気に葉子さんからのプレゼントだ！　やった！　二重に嬉しい！

「端っこにサインも書いてくださいね」
「了解」

私は小躍りしそうなテンションでスケッチブックを返し、続きを催促した。

絵はその日の内に完成し、私の部屋に飾られた。

○

葉子さんと出会ってから月日は流れた。というと大袈裟だけど。そろそろ梅雨に突入だ。

今日は朝から雲っていて降水確率は４０％。折り畳みを置き傘してるけど、多分降るだろうから私は傘を持って出た。

「あ、降ってきたー」
「そうだね」

前の席に座ってた彩華が窓の外を見ながら落胆の声をあげた。
あの日の雨は私にとって特別だったけど、だからって雨が好きになったわけじゃない。

「最悪ぅ、傘持ってきてないわ」
「持ってきなよ。置き傘は？」
「宵越しの傘は持たない主義なの」
「意味がわからないから」
「美代、傘は？」
「持って来てるよ」

尋ねてきる彩華にこの後の展開が読めたけど、あえて言わずにいると彩華はさっと鞄と一緒にひっかけておいた私の傘をとって小首を傾けた。

「貸、し、て？」
「かわいこぶりながらさりげに私の傘奪おうとしないで」
「いいじゃん。置き傘あんでしょ？」
「折り畳みがあるから、そっち貸してあげる」
「えー？　私折り畳み苦手なのよね。おっきいのがいいな」
「しょうがないなぁ。明日返してよね」

「あんがと。ま、放課後までに止んだらいらないけどね」

言いながら彩華は私に傘を返してきたのでまたひっかけた。

正直傘をひっかけてると邪魔だし、できるだけ持ってきたくない彩華の気持ちはわかる。下駄箱に学年別置き傘エリアがあるけど、借りパクし放題で、ビニ傘以外刺さってないし私も使わない。面倒だ。

放課後になっても、雨はやまなかった。

「んじゃ、先に帰んね。この礼はまた今度するから」

彩華は揚々と私の傘をとって駆けるように帰っていった。

葉子さんのとこに通いだしてから彩香との付き合いは激減したけど、彩華は彩華で新しいバイトとか始めて忙しいらしく、特に詮索もされてない。

「美代ちん、ばいばーい」

「ばいばい」

他のクラスメートに挨拶をして私も教室を出た。

「……うげ」

靴をはきかえ、入口で折り畳み傘を広げて思わずうめき声をもらした。

折り畳み傘の骨が一本折れていた。一度慌てて教科書をつめた時に折り畳みを押し潰した記憶はあるが、まさかあれくらいで折れるとは。結構長く使ってる傘だし仕方ないか。

まあ、一本くらいなら見た目は悪いけど使えなくはない。折り畳みで元々狭いのがさらに傘内範囲が狭くなったけど仕方ない。

「あれ、下村、傘折れてんじゃん」
「ん？　うん、折れてた。新しいの買わなきゃだ」
「送ってってやろうか？」
「ありがと。でも大丈夫。まだまだ余裕ですよ。んじゃ、ばいばい」

通りすがりのクラスメートの善意に一瞬喜んだけど、たぶん彼はいいやつで家まで送ろうとするだろうし、私は家より先に葉子さん家に行きたいので断った。

折り畳み傘をさして鞄をかつぎなおし、私は学校を後にした。

○

「今、お湯わかす」
「すみません」

大丈夫大丈夫と思ってたけど、思いのほか風が強くて傘がひっくり返って壊れ、びしょ濡れで葉子さん家についた。
服も乾かさないといけないから、お風呂をかりることにした。

「…あれ」

「ん？」
「いや、何で葉子さんも脱いでるんですか？」
「ついで」

つ、ついでって。いやでもまあ、そのほうが光熱費安くすむか。
一人暮らしの葉子さん家にお邪魔しまくってる私に拒否権はない。ていうかちょっとは恥ずかしいけど、むしろ目の保養なので私は嬉々として服をぬいだ。

お湯をわかす間に二人で体を洗いっこしてから浴槽にはいる。

「はぁー」

思わず息がもれる。極楽極楽。
声には出さないけど葉子さんも気持ちよさそうな気がする。上気して全体的に赤みがかっていて、とても色っぽい。そしてボインだ。

「葉子さん、ちょっと聞いていいですか？」
「なに？」
「どうやったらそんなに胸が大きくなるんですか？」
「……自然に」

答えながら葉子さんは胸を隠すように腕組をした。あれ、よくある質問のはずなのに何故かセクハラした気分に。

お風呂からあがる。前は緊張していたけど、もう慣れているので勝手知ったるとばかりにドライヤーをリビングに持って行く。

「葉子さん、髪をかわかしてあげます。だからお礼に葉子さんも私にしてください」

「……人にしたことがない。下手でもいいなら、いい」
「ばっちこいです」

葉子さんは積極的に何かしてくれることは少ないけど、私がしてってお願いするとだいたいやってくれるからついつい甘えてしまう。
ずっと姉や兄に憧れていたから、葉子さんは優しいお姉さんみたいで、すごく嬉しい。葉子さんはダメなことは本気で絶対ダメっていうから、それもまた嬉しい。ちゃんと注意してくれたりするのもお姉さんて感じだ。

ソファに座った葉子さんの後ろに回り、ドライヤーをかけていく。
あ、そういえば葉子さんの髪に触るの初めてだ。自分がやってもらうことしか考えてなかったけど。意外に葉子さんの髪って太めかも。でも柔らかいしキューティクルくるってるし羨ましいなぁ。

「ねー、葉子さん」
「なに？」
「葉子さんは髪染めないんですか？」
「染めない」
「たまには染めたらいいのに。あ、私染めますよ。むしろ染めたいです」
「染めない」
「えー、なんでですか？」
「染めたくないから」
「むぅ。まあ、葉子さん結構薄めですし、必要ないっちゃないですけど」

でも葉子さんならもっと突拍子もない色とか似合いそうだし染めたいなぁ。メッシュだけでも赤とかいれたら格好よさそう。

「美代、染めたいの？」
「んー、私自身は……たまに染めたいとは思いますね」
「染めないで」
「え？　まあ校則で禁止だし染めませんけど。なんでですか？」
「美代の髪は綺麗だから、染めたらダメ。今のがいい」
「お、おぅ……」

私の髪はボリュームが多めで、伸びるとちょっと重くなる感じなので卒業したら染めようと漠然と思ってたのだけど……。

「わかりました。染めません」

よく知らないけど、最近は色々な薬品がでてるし、染める＝髪が傷むというのはちょっと短絡的な気もする。でも葉子さんがそういうなら染めないでおこう。

「はい、できました。次は葉子さんの番ですよ」
「ん」

葉子さんの隣に座ってドライヤーを渡す。

「ん」

葉子さんが立ち上がり、後ろ側に回る。
まるで撫でるような優しい手つきで私の髪をとかし、乾かしていく。

「……」

葉子さんは無言で、私もなにも言わなかった。ただ気持ち良くて、

気づいたら私は眠っていた。

○

「美代」

声をかけられながら揺すられ、私は目を覚ました。

「…あ、れ」

なんだこの丸い……葉子さんの顔が真上に見える。そしてこのなんとも言えない枕加減。まさか膝枕！？

「起きて」

「ああっ、そんなご無体なっ」

感動にひたる前に肩を掴んで強引に起こされた。仕方ないので目を擦りながら自力で起き上がる。

「うわ、もうこんな時間！？」

私がいつも葉子さん家を出る時間だった。せめて後5分早く起きたら膝枕を堪能できたのに！

「ん、雨も止んだ」
「うー、膝枕ー」
「…また明日。今日は帰った方がいい」
「え、明日膝枕してくれるんですか？」
「構わない」
「やったね！　そうと決まれば帰ってさっさと眠りますね！　葉子さんばいばい！」
「ん」

手をあげた葉子さんに手を振り返し、私は家に帰った。
最初は見送ってくれてたけど今はもうない。ん、だけの返事も増えてきた。これは手を抜いてるというより気を許してくれてる証だと思うので、何となく嬉しい。

あー、明日が楽しみだなぁ。

○

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3410w/

番外編とかその他

2011年12月29日10時53分発行